



Title	ロシア語史概説（4）：序説
Author(s)	石田，修一
Citation	大阪外国語大学論集．1991， 6， p. 25-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79548
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ロシア語史概説(4) (序説)

石田修一

Очерк по истории русского языка (4) (Введение)

Сюити ИСИДА

VIII. Периодизация истории русского языка

IX. Дивергентные процессы древнерусского языка

〔VIII〕ロシア語史の時代区分

原初年代記が言うところの「ヴァリャギからグレキへの」⁽¹⁾水路上、すなわち河川と連水陸路(волокъ)を繋いだ通商ルートの要衝地点に位置したキエフに成立した統一国家は古代ロシア民族(народность)の結集とキエフを中心としたいわゆるキエフ・コイネー(киевское койне)の生成と発展を促して行った、とロシア語史家は述べている⁽²⁾。こうした性質のキエフ弁の権威は、古代ロシア民族の言語としての古代ロシア語(древнерусский язык)の収束過程(конвергентные процессы)を早めたのであるが、一方逆に、やがて封建的分割期の到来とともに、古代ロシア語も分岐・拡散の過程(дивергентные процессы)、いわば円心的分解の過程を辿るのである。すなわち方言的分化過程である。そして、この収束と拡散の過程こそ古代ロシア語の歴史を前・後期に二分するのである。さらに後期古代ロシア語の方言分化がどのように進行し、かつそれが現在のロシア語を初めとする東スラヴ諸語やロシア方言にどのようにつながっているかという問題は、すでに述べたシャフマトフ説との関連で極めて興味深い、その前に先

ずロシア語史の時代区分について言及しておく必要があろう。

一般に、ロシア標準語史 (история русского литературного языка) の記述に当たっては、前もってロシア標準語史の時代区分の問題が取り扱われるのが常であるが、ロシア語歴史文法 (историческая грамматика русского языка) の記述はそれを必須条件とはしていないかに見える。もちろん、歴史文法にとっても、言語構造の変化が時空を超越して存在するものではない以上、時代区分の課題は重要であるはずである。しかし、歴史文法がこの課題を扱うとき、それは明確に標準語に照準を合わせて区分するのとは異なり、区分の基準をどこに置くかによってさまざまな区分が有り得ることを前提としてこれを行わなければならないのである。したがって、例えば、ボルコフスキー、クズネツォフの「ロシア語歴史文法」⁽³⁾はこの課題を扱って、①言語史と民族史、②文語と口語の関係、③言語構造自体の変化の時間関係等を勘案すれば、①②③等それぞれの基準に応じてさまざまな時代区分が可能であることを提示しているに過ぎない。そこで、佐々木氏の「ロシア古文典《音韻考》」⁽⁴⁾は、ボルコフスキー、クズネツォフの時代区分に不満を表明し、「純粋に語学的な立場から」設定すべき時代区分を提案しているが、氏の区分の特徴は、弱母音消滅に関わる時期(12世紀末)を基点にして、それ以前を狭義の古代ロシア語 (древнерусский язык)、それ以後を古ロシア語 (старорусский язык-筆者の理解でも、また一般的にも、通常は14-17世紀の中世[大]ロシア語を意味すると思われるが、訳語が与えられていないため、氏の趣旨を汲んで仮に訳した→以下の時代区分参照)、さらにこの二つを合わせた時代を広義での古代ロシア語として、これが17世紀末まで、それ以後を現代ロシア語 (современный русский язык) とした点にある。一方、ここに言う狭義の古代ロシア語は文字言語の出現、すなわちオストロミール福音書 (Остромирово евангелие) (1056-1057、アブラコス、すなわち教会歴に従って配列された聖書の朗唱用抜粋であって、通常古代ロシアの最古文献とされるが、古スラヴ語の原典から書き写されたもので、いわゆるロシア教会スラヴ語 церковнославянский язык русского изводаである) の書かれた時期を基点として二分されるのである。筆者は、今、氏の試みられた時代区分の是非をいちいち詳細に問うものではないが、この区分それ自体が「純粋に語学的な」区分とは言い難いと考えている。ただし、筆者自身が相対時間 (относительное время) = 言語時間 (лингвистическое время) の観点からだけ時代区分を試みたとしても、ロシア語の言語体系が開音節法則の東スラヴの実現と弱母音の消滅という二つの事件を基点として大きく連鎖反応的に変容して行ったという認識を基礎に据えるであろうが、これとても形態や統語分野の言語時間を視野の外に置いたものなのである。

ガルシコヴァ (Горшкова, К.В.)、ハブルガエフの「ロシア語歴史文法」は、構造としての言語自体の時代区分 (言語内史 внутренняя история языка)、つまり佐々木氏の「純粋に語学的な立場から」の時代区分が、民族史や文化史と深く結びついた伝達手段としての言語の時代区分 (言語外史 внешняя история языка) から相対的に独立したものであることは言うまでもないが、その独立性は絶対的なものではなく、内史は外史を反映こそすれ、外史は決して内史

に対して依存・従属関係にある訳ではないから、この二つの間には階層的依存・従属関係（иерархическая зависимость）が存するはずであり、したがってそこにこそ言語の社会的機能の変化に照準を合わせた一般的時代区分（общая периодизация）設定の可能性、有意義性が存するのだとしている。そして、概ねではあるが、こうした絶対的時間軸（ось абсолютного времени）を基点とした一般的時代区分に、個々さまざまな言語構造（例えば、音韻、形態等の個々の変化）の時代区分（個々の言語事象間の時間関係）を相関させることは可能であり⁽⁵⁾、またそこにこそ語史記述の意義が存するのである。筆者も亦、言語研究が人文科学であり抽象のみを専らとする科学ではない以上、こうした観点は極めて普遍妥当なものであらうと考える。

ガルシコヴァ、ハブルガエフはこの立場に立って次のような一般的時代区分を行っているが⁽⁶⁾、以下では、これを支持する立場から、また基本的にはそれに則りながら、必要と思われる事項を補いつつ、より具体的な形で提示しておく。

1. 東スラヴ期（Восточнославянский период、6－9世紀）。非スラヴ語、就中バルトやフィン・ウゴル語との相互接触を行いつつ、西や南のスラヴとは異なる特徴を持った方言体系としての東スラヴ語を拡大・醸成して行った時期。言語的には、後期スラヴ祖語期に次第に輪郭を鮮明にしてくる、共通スラヴ的傾向の優れて東スラヴの実現、例えば、東スラヴ的ヨット化（йотация）、語頭の〔o〕（円唇化）、母音重挿（полногласие）、鼻母音消滅、*tьgt型の保存（子音間流音前に弱母音を置くタイプの保存）等々の東スラヴ的再編（→〔VII〕参照）がこの時期に属する。そしてこの時期の終わりは、氏族共同体から村落共同体への移行、そして手工業の発展（都市型集落の発展）、さらにその結果として初期の国家的統一体の発生に伴って、種族方言の基礎の上に地域方言が形成されて行った時期に当たる。

2. 古代ロシア期（Древнерусский период、9－14世紀）。古代ロシア民族（народность）の形成と発展の時期。言語発展の基本的な傾向から見て、これを11世紀末－12世紀初めを基点として初期・後期の二つの時期に分ける。

初期古代ロシア期（Ранний древнерусский период）－東スラヴ人の国家統一体（古代ルーシ Древняя Русь）＝古代ロシア封建国家の成立とそれに伴う古代ロシア民族の形成、そして古代ロシア民族の共通語としての古代ロシア語（Древнерусский язык）の形成期。この時期、全東スラヴ的な、したがって、全体として西スラヴや南スラヴに対立するような言語特徴が東スラヴ方言全域に広がって行く。先期（前述の東スラヴ期）の東スラヴの言語特徴を古代ルーシ全土に拡張するとともに、この期の言語改新（例えば、弱母音消滅の東スラヴ的な態様に現われるような→〔VII〕参照）も東スラヴ全土を席卷して等語線を形成しない。また、この期の終わりは古代ロシア最古の文献（例えば、オストロミール福音書 1056－1057）の出現期に当たるが、こうした共通特徴は、国家、及び中世国家と中世的文化の必然的付随物たる公教会の、言語としての文語（古スラヴ語＝古代教会スラヴ語をベースにした）にも波及して行ったのである。

ただし、厳密に言えば、弱母音の消滅過程は、ここに言う一般的時代区分の前・後期の両時期に亘っており、10-11世紀の境界辺りから12世紀後半頃まで続いた長い過程である。文献的には、先ずは、絶対的弱音節（「弱い位置」）の弱母音の消失（例えば、オストロミール福音書において *къто, кѣнязь, пѣтица, кѣнигамъ* > *кто, князь, птица, книгамъ* 等）に始まり、「強い位置」弱母音の強母音化（完全母音化）現象が現れるのは12世紀以後であるが、12世紀の後半には少なくとも口語では弱母音を排除した新しい母音体系が確立していたと考えられる。そして、弱母音消滅に関わって東スラヴが統一した独自性を顕すのは、まさにこの「強い位置」弱母音の強母音化の態様に他ならない（→ [VII 参照]）。その態様が東スラヴ（古代ロシア）内で一様であり、等語線を形成しないという事実は、弱母音の強母音化過程が古代ロシア民族の統合過程（前期）に伴って拡張して行った東スラヴ語の収束過程に関連した言語改新であることを表している。そうであればこそ、弱母音の強母音化過程は、ここに言う一般的時代区分の古代ロシア前期（初期）に配分されるのである。尤も、弱母音消滅が惹起する様々な連鎖反応現象の過程は、以下に見るように、東スラヴ内においてそれぞれ異なっており、それは古代ロシア語の分岐・拡散過程（後期）に属する。

言語内史の観点から歴史文法が弱母音の消滅過程を基点としてそれ以前と以後に区分して記述する手法はしばしば行われているが、そこには勿論合理的な理由がないわけではない。スラヴ祖語の崩壊がおおよそ6世紀のことであり、古代ロシア民族の言語としての古代ロシア語の成立が9世紀、古代ロシアの最古文献の出現期が11世紀中葉であることを考えれば、実際問題として、統合以前の東スラヴ諸方言の音韻発達過程と統一古代ロシア語に収斂した過程を厳密に区別することは不可能であり、それらが東スラヴ語の共通発達過程として一括されるのは当然のことである。

後期古代ロシア期（Поздний древнерусский период）—古代ルーシ（キエフ国家）の封建的分裂期に当たり、それに関連して大きな方言地帯（言語改新の局地化地域）の分化が進行する。先ずは古代ロシア語の北東部と南西部、その後さらに他の局地的な言語改新地域の分化が始まる。例えば、スラヴ祖語後期から継承してきたいわゆる緊張弱母音（напряженные редуцированные）（[j] の前の [ъ] [ь] [y] [i] の位置的異音で、[j] の影響によってこれらが [ъ̣, y>ÿ] [ь̣, i>î] のように音質を変えたのであるが、この位置的異音 [ÿ, î] をいう。ただし、字母の面では特別な表現手段を持たず、それぞれ [ы, и] をもって代用している。例 *dobrъ̣jъ* > *dobrÿjъ* = добрыи）は通常の弱母音 [ъ, ь] と全く同じように「弱い位置」では消失（ゼロ化）、「強い位置」では強母音化するが（→ [VII 参照]）、ただこの強母音化の態様は北東部方言（ロシア語の基礎になった）と南西部や西部方言（ウクライナ語や白ロシア語の基礎になった）とは異なる。前者では [ÿ, î] はそれぞれ [o, e] のように、後者では [y, i]（ウクライナ語はさらにその後 [y=i]）のように強母音化する（例、古代ロシア *molodÿjъ* = молодын, ロシア молодой, 白ロシア малады, ウクライナ молодий、なお現代ロシア語の形容詞語尾がアクセントを有するとき以外は [-ой, -ей] でなく [-ый, -ий] とするのは教会スラヴ語の書

記法の影響を源としている)。あるいはまた、この時期、弱母音消滅が惹起した連鎖反応のあり方はすべて一様である訳ではない。例えば、南西部では、弱母音消滅後に発生した新しい閉音節における [o, e] を代償延長 (compensative lengthening, Kompensationsdehnung, Ersatzdehnung) 的に変質させている (例、камень>камѣнь、すなわち弱母音 [ь] の消失を償うべく先行の新しい閉音節の [e] を長音化して [ѣ] とした。ソボレフスキー (Соболевский, А.И.) はこれを「新しい [ѣ]」《новый [ѣ]》と呼んで、印欧語の二重母音や長母音に起源を持つ [*ai, oi, ē>ě (=ѣ)] のような「古い [ѣ]」《древний [ѣ]》と区別した)⁽⁷⁾。現在こうした現象をウクライナ語や白ロシア方言はさらに変質させた形で反映させているが (例、шесть>шиість>шість)、ロシア語はこうした母音の延長過程自体を知らない。ウクライナ語が「強い位置」の弱母音から発生した [o, e] を代償延長させていないことから考えれば (днь>деньであって、дѣнь>діень>діньとならない)、この過程が「強い」弱母音の強母音化以前に萌芽したであろうことを示しているが、古代ロシア方言を南北に分かつ古い方言分化の一つであると考えられる。

未来の大ロシア語 (Великорусский язык) の方言区分単位の基本となるような、ノヴゴロド・ブスコフ (北西部)、ロストフ・スズダリ (北東部)、リャザン (南東部)、スモレンスク (西部) 方言等が浮き彫りになってくるのもこの時期である。さらにこの時期の終わり頃にはタタール・モンゴルの来襲によって古代ルーシはいくつかの勢力圏に細分化され、その過程の中で新しい東スラヴ民族と民族語の形成が始まるのである。すなわち、これ以後は大ロシア語、ウクライナ語、白ロシア語の発展史毎にそれぞれ個別的な時代区分を必要とする。

3. 中世ロシア (大ロシア) 期 (Старорусский (Великорусский) период, 14-17世紀)。大ロシア民族 (великорусская народность) の形成、発展の時期。大ロシア民族は、リトアニア大公国の勢力圏に入らなかった東スラヴ人が、モスクワを中心とした東スラヴ人国家に結集していく過程で形成される。ここから、大ロシア方言群は他の東スラヴ方言群 (ウクライナ、白ロシア方言群) より分化していく。局地的な方言的言語改新の拡張範囲は次第に狭まっていく一方で、北東部起源の言語特徴は北部、北西部 (ノヴゴロド方向へ)、さらに南部方向へと (オカ川を越えて) 広がりつつ、全体として次第に大ロシア語的特徴を顕して行くのである。

そしてこの時期に、大ロシア民族の形成過程における異種体系の東スラヴ方言の相互作用の中から過渡的な中部ロシア方言 (среднерусские говоры) が生成されていく。かくして、モスクワ方言は混交的な性格を得るが、そうした性格は中世ロシア末期頃には大ロシア民族国家 (национальное великорусское государство) たるモスクワ・ルーシ (Московская Русь) の公文書にも反映し始め、それはいよいよ全国共通の伝達手段機能を帯びるに至るのである。

なお、以上によって明らかのように、古代ロシア語 (древнерусский язык) なるタームに含まれる「ロシア語」(-русский<-рус-ьск-ъ-jь) という要素は、古代ルーシ期 (9-14世紀) の東スラヴ全体に関わって使用されるのであり (また伝統的にかなりの長きに亘って東スラヴ語

の意味で使われ、例えばシャフマトフやヤギチもそうであった→本稿[V]参照)、大ロシア語(великорусский язык)という語が中世以後(14世紀以後)の東スラヴの他の二言語、すなわちウクライナ語(小ロシア語)や白ロシア語に対置して呼称されるものであることを考慮しておく必要がある。そして、中世ロシア語(старорусский язык:逐語的には、旧ロシア語)なる語はまさにこの大ロシア語を指している。換言すれば、中世以後、大ロシア語(中世ロシア語)と並んで中世ウクライナ語、中世白ロシア語の時代に入るのである。それ故、この二つの「ロシア」という要素は本来全く異なる概念を表しており、前者は古代ルーシ(Древняя Русь)に、後者は大ルーシ(Великая Русь)に対応するのである。以上からみれば、上記佐々木氏のстарорусский(古ロシア?)は、氏自身も認めておられるように、氏独自の見識に基づいて認定された特異な用法と言わざるを得ない。

4. ロシア民族語の形成開始期(Начальный период формирования национального русского языка, 17世紀中葉—18世紀)。ロシア民族(нация)の形成期であり、全国的な標準語と地域方言間の関係の根本的再編期。中央地域での方言生成過程は停止し、方言の均等化が強力に進行するが、この中で大ロシアの中央(心)の言語が全民族的な言語規範体系として決定的な意義を有するに至る。また、中世の全期間を通じて東スラヴの文章語の基礎になって来た教会スラヴ語と現用口語間の矛盾が露呈してくるが、この期の終わり頃には、中央ロシア方言(口語)に照準を合わせた新しい標準語の規範体系を作り上げながらこの矛盾を解消していく。

5. ロシア民族語の発展期(Период развития национального русского языка, 19—20世紀)。プーシキンの活動期より始まる。ここに現代ロシア標準語の規範体系が完成し、それが民族(нация)の基礎的伝達手段になっていく。この中で、方言の均等化が進み、それは各地域内毎の共通伝達手段としての価値を失い、20世紀の初頭には村落住民のみの共有物、すなわち社会・地域方言に変じていく。一方、統一された都市コイネーと規範的標準語との相互接近の中で、日常的な話し言葉の規範体系も整っていく。

6. ロシア民族語発展の現段階(Современный период развития русского национального языка)。

[VIII] 古代ロシア語の拡散過程—後期古代ロシア語の方言分化

(1)上述のように、初期(前期)古代ロシア期は中央集権的国家としてのルーシが政治・経済・文化的に結合を深めるとともに(9—11世紀)、古代ロシア民族が形成されて行った時代である。そして言語面では、既に述べた起源の異なる異種スラヴ方言が古代ロシア民族の言語(古代ロシア語)という社会組織に組み込まれて行った時期である。この間、東スラヴ方言は、対立する方言特徴の一方が他方を駆逐して拡張して行く方法で、あるいはまた共通言語体験(общие

языковые переживания, единство языковых переживаний、例えば *tj, *kt'; *dj > ч; ж、母音重挿、語頭の [o]、第二次軟子音の発達、鼻母音改新の態様等の共通の言語改新過程→[Ⅶ] 参照)を通して、相当程度均質化して行ったのである。それがこの期の大きな流れである。

しかし、それにもかかわらず、古代ロシア以前のあらゆる方言特徴が払拭ないしは均質化されてしまった訳ではなく、「10世紀-11世紀古代ロシア民族の共通国語 (общенародный язык) は地域毎に様々な特色を持った……例えば、東スラヴ南部は、北部・北西部・北東部と違って破裂音の [r] を摩擦音の [r̥] に変え、また、北部・北西部は恐らく言語的混交 (скрещивание) によって (スラヴ人によるフィン・ウゴル人の吸収によって) ツ弁 (破裂音の [ɬ] と [ç] を弁別せず、軟音の [ɲ] を以てそれに当てる→本稿 [Ⅴ] [Ⅶ] 参照) を獲得した。西スラヴに隣接するより狭い地域では、非常に古くから共通スラヴ語の tl, dl を残していたが、それはのち、恐らく (バルト人との) 言語的混交によって、kl, gl に変わった→ (本稿 [Ⅶ] 参照)」(アヴァネソフ) (8)。

ここに言うツ弁と r=r̥ については、シャフマトフ説が提起した東スラヴ語の分化問題に関連しており、後期古代ロシアの方言分化を考えるに先立って、若干詳しく検討しておきたい。

ツ弁の起源について、シャフマトフがフィンの影響の可能性を匂わせながら、一方でリャヒ説、いわゆる「マズリ訛 (мазурение)」(軟シュー音と軟スー音の非弁別)、すなわちポーランド・マズリ (Mazury) 地方方言の影響の可能性をより強く打ち出したことは良く知られているが、今日支配的なのは、ボードゥアン・ド・クルテネやチェルヌィシェフ (Чернышев, В.И.) に代表されるフィン・ウゴル基層説であると思われる⁽⁹⁾。したがって、ツ弁の最初の分布圏はバルト海沿岸フィン人のスラヴ化地域であり、ここを原点として北部・北西部一帯 (ノヴゴロド、プスコフ、ポロツク、スモレンスク) に、更にオカ中流域にまで広がって行ったと考えられるのである。マズリ弁一般の影響としてだけでは説明がつかないツ弁地域の存在について、アヴァネソフは次のように述べている。「ツ弁はモスクヴァ近郊東部及びリャザン州北部 (いわゆるリャザン・メシシェーラ地域) の方言全体の共通特徴である……これらすべての特徴がメシシェーラ地域の範囲を越える隣接方言に存在しないこと、また同時にリャザン・メシシェーラ方言が構造的に極めて多様であることを考慮すれば、上述の特徴 (ツ弁) はメシシェーラ基層の (それも比較的後の) 特徴であるという結論に達せざるを得ない」⁽¹⁰⁾。すなわち、ツ弁の拡張範囲は北部・北西部や西方に隣接する地域に限っている訳ではなく、ノヴゴロド・コロニーの範囲外にも拡張しているのである。すなわち、ノヴゴロド等 (ツ弁を文証する古代ロシア最古のものはノヴゴロドの古文獻、Новгородская минея 1095) のツ弁地域とは全く無関係なリャザン・メシシェーラ (рязанская мешера: メシシェーラは11-12世紀頃までオカ中流域にいたフィン・ウゴル系種族で、最終的にはその大部分はロシア化した) 地域の方言において行われており、このことは例え一般的にツ弁地域とされる北部や北西部から離れた地域であっても、機能的 (音素的) に二種類の破裂音 ([ɬ], [ç]) の弁別を知らないフィン・ウゴル基層に関係するところでは、調音

的に類似したこれら二つの破擦音を一つの無声破擦音として([ɥ']) :それは音声学的に必ずしも元の破擦音と同じである必要はないが)一般化したことを物語っている。本来スラヴにとって、цやчはいわゆる口蓋化の結果獲得されたものであり(→[VII])、古代ロシア語にとっても当初はその音韻的性格は不完全なものであって、語義、語形の弁別にとって必須のものではないという構造的特徴を持っている限り、基層の影響を受け易いのは当然のことであったかもしれない。以上によって、ツ弁は、シャフマトフ説のように、古いスラヴの種族方言に帰することはできないのであって、むしろ血縁関係が崩壊し、年代記の言う「ノヴゴロド人」が代表する北部東スラヴ人がフィン系原住民をロシア化していく過程で発達して行った特徴だと考えられるのである。そして、上述のようにツ弁を証する最古の文献の出現期は11世紀末であるけれども、それ以上に早い北部の文献自体が存在しない以上、文献の出現期を以てツ弁の発生とする事はできないのである。フィリンやハブルガエフを総合するならば、ノヴゴロド地域(Новгородчина)、プスコフ地域(Псковщина)、すなわちドネプル、ヴォルガ上流域、イリメニ湖、チュド湖隣接地域一帯にスラヴ人が定住するのは6-8世紀であることから、ツ弁の発生は、それ以前であるはずはなく、ハブルガエフは、7-8世紀頃、フィリンは、定住以後しばらく時間を要したはずであるから8-9世紀頃だと推定している⁽¹¹⁾。

さて、後口蓋破裂(閉鎖)音[g]に関係する方言的差異の問題である。スラヴ祖語においては、[g]に本来後口蓋破裂音(閉鎖音)であったが、方言によっては非常に早くからその閉鎖を失い後口蓋摩擦音[ɣ]に転じ、その後いくつかの方言ではさらに咽頭摩擦音(pharyngeal)[h]に変質したと言われる⁽¹²⁾。すなわち[g]が本来であり、[ɣ][h]はある時期スラヴ方言を席卷した言語改新である。勿論ロシア語にとっては現在この言語改新は標準語の規範の枠外に出てしまっているが、方言にとっては極めて安定した特徴をなしているといえる。そしてこの[g>ɣ>h]の過程は音素論的にも生理学的にも立証済みであり、疑問の余地はないと言われる。スラヴ祖語の無声後口蓋摩擦音[ch](=x)は、本来有声対立項を知らなかったが(k-chの関係が存在したが)、のち一連の方言において音素の再編が生じ、g-chの対立関係を得たのであり、これは生理学的には[g]における閉鎖の弱化・消失、したがって破裂音の摩擦音への転化を生ぜしめ、更にのち一連の語では咽頭摩擦音への転化を引き起したのである(g>ɣ>h)⁽¹³⁾。

ところで、フィリンによれば、スラヴにおける[g] - [ɣ] - [h]の分布域(→[VII]参照)は次のようになる⁽¹⁴⁾：

①中部 [ɣ] : 南大ロシア方言、白ロシア語、スロヴェニア西部方言

[h] : ウクライナ語、スロヴァキア語、チェコ語、上ソルブ語、ただし、スロヴェニア西部方言及び白ロシア南西部方言では[ɣ]と[h]は共存している。

②北部 [g] : 北大ロシア方言、ポーランド語、カシューブ語、ポラブ語、下ソルブ語

③南部 [g] : ブルガリア語、マケドニア語、セルボ・クロアチア語、スロヴェニア語(主要部)

しかし、g>ɣ(h)の過程を辿ったとする立場が正しいとしても、その発生時期をめぐっては、

それをスラヴ祖語の時代にまで遡る現象だとして非常に早期に割り当てる説と、比較的に後になって、スラヴ祖語崩壊後、それぞれのスラヴ語成立以後に、それぞれのスラヴ語毎に相互無縁・個別に生じた変化過程であるとする二つの仮説が存在しており、今日でも最も困難な、未解明の問題の一つである。ここでは、主としてフィリン、ベルンシュタインに従いつつ、ロシア語成立史を考える上で必要と思われる主な論点・学説史についてのみ触れておくことにする。

例えば、シャフマトフは「 γ による g の完全駆逐は既にスラヴ祖語方言において発生した」⁽¹⁵⁾とし、トルベツコイもまた同様の主張を行っている⁽¹⁶⁾。いわゆる第二次口蓋化の結果、 $k-c (=ts)$; $g-3 (=dz)$; $h (=x) -s/\$$ の交替が発生したことについては既に述べたが、トルベツコイによれば、 $g > \gamma$ に変わったのは、 $g > 3 (=dz) > z$ の変化が生じたスラヴ祖語方言であって（ただし、 c と $\$$ の弁別がなく、 $ch (=x)$ が消失傾向を示す方言を除く）、結果として $\check{c}-\check{z}-\check{s}$; $c-z-s$ の三項二系列の体系は $k-g-ch$ の三項系列に対応しきれなくなり、そのことが $k-\gamma-ch$ への変化、すなわち新しい三項三系列の体系への再編を促したと言うのである。換言すれば、いま破裂の要素を含むものをハ、摩擦の要素を含むものをマと表すならば、三系列全てにおいて、ハ-ハ-マの体系がハ-マ-マの体系に再編されたからだということになる。さらにトルベツコイは、チェコ語における $k\check{y}d \rightarrow kde, kdy$ （逆行同化によって gde, gdy と発音、ロシア語の где, когда に対応）と $t\check{b}-\gamma\check{y}d \rightarrow tehdy$ （ロシア語の тогда に対応）との比較によって、 $g > \gamma$ の変化は弱母音消滅以前であるとした（ナハティガル Nahtigal, R. も同じ）⁽¹⁷⁾。すなわち、弱母音の消滅以後 k の有声化によって生じた g は γ に転じていないことをもって古代チェコ語における γ の発生は弱母音消滅以前の現象であるという推定を下したのである。しかし、フィリンは、トルベツコイの音韻論的な説明は、南スラヴ語や $\check{c}, c$ の両系列が存在、 $\check{c}, c$ の弁別を知っているロシア方言やレヒ群を説明できないとし、また、ベルンシュタインは、トルベツコイとナハティガルの推定はこの過程が弱母音消滅以後かなり時間を経て後であるということを考えていないとしている。トラヴニーチェク (Trávníček, F.) も、チェコで書かれた古いラテン語の文献資料やチェコの古い地名のラテン語及びドイツ語による表記例（ h でなく g が使用されている、独語 Prag, 羅語 Praga 等）によって、またチェコやスロヴァキアにおける文献例では g の h による代替は早くとも12世紀以後であることを立証して、この変化過程を12-13世紀であると推定している⁽¹⁸⁾。

現在のスラヴィストの多くは、概して、 $g > \gamma > h$ の変化過程を比較的遅い時期である12-13世紀頃に設定し、加えて、各スラヴ毎に個別に発生した現象であるという認識に立っていると言えるが⁽¹⁹⁾、そうだとすればこれらの音の地理的分布は随分と奇妙な形を取っていることになる。ベルンシュタインが作成している $g-\gamma$ (h) 対立等語線を見れば、 γ はスラヴ語圏の中央部を占め、それを取り囲むように g が分布するのである⁽²⁰⁾。 γ がもし各語毎に個別に発生したとすれば、このようにまとまった形を取り得たであろうか?!そこに他民族基層説が登場する余地があるのである。スラヴ語における γ がスキタイ・サルマタイ基層（東イラン系）の影響だとするアバ

イエフ (Абаев, В.И.) 説はその典型である。アバイエフによれば、東イラン諸語では、 $g > \gamma$ は既に紀元前に完了しており、スキタイ・サルマタイ人は数百年に亘って南ロシアのステップ及び森林ステップ地帯を占めて、スラヴ人とは長期の接触を行っていた筈であり、東スラヴの γ (h) の分布域はほとんど完全にイラン語地名や物質文化に一致していると言う。しかし、フィリンは、現在のように拡散せず、今日から比べれば相対的に狭いまとまった範囲内にあった当時の原始スラヴ人が当時のイラン人から γ を継承したのであれば、当然それはスラヴ語普遍の現象として残存した筈であり、また南ロシアには幾多の民族が交替・展開してきたのであり、彼らが飛脚リレーのように γ を継承して現在に最古の等語線を残しているとは考えられず、他民族基層説自体は捨て難いが、当面アバイエフ説に拘束される必要はない、としている⁽²¹⁾。一方、比較的最近であるが、コロミェツィによって基層説は反復されており、スラヴ祖語から分化した直後のスラヴ諸語の音韻体系に g を h に変え得るような内的条件が存在せず、一方いくつかの隣接語圏に連続的にこの交替が発生している限り、この交替は、スラヴ人居住以前に当該地域に広がっていたある基層言語の影響あるいは更にそれ以上に古い基層の作用を受けた複数言語基層の影響の結果だと考え得る根拠があり、白ロシア語や南ロシア方言の γ は恐らく h の持つ東スラヴ方言 (ウクライナ語) から g を持つ方言への二次的な影響の結果である、とする解釈が出てくるのである⁽²²⁾。ハブルガエフも、ベルンシュタインの作成した $g-\gamma$ (h) 対立分布図を見れば、この言語改新 (γ) の中心は一つであり、それは6-7世紀のブラハ型遺跡 (プリピャチ沿いボレーシエからモラヴィヤまでの) の占める範囲内、すなわちスクラヴェン文化圏内である、として、次のように述べている。「ここで、6世紀にバルカンに (アント人と共に) 入植したスラヴ人の方言が摩擦音 γ (h) を知らず、一方7-8世紀以後ドネプル中流域からデスナ流域へ、更にプリピャチ以遠へと浸透を開始したスラヴ人がこの特徴を既に持っていたと考えるならば、 $g > \gamma$ は先ずスクラヴェン圏東部-7世紀-8世紀初以前のジトミール・コルチャク遺跡の創始者の方言-において形成され、ここからその後ルーシの隣接方言へ、そして西方向へスロヴァキア方言 (それは未来のスロヴェニア方言と共に単一の方言地帯を構成していた) やモラヴィア方言、そしてついにはチェコや上ソルブの方言にまで一広がって行ったと推定しない訳には行かない。そこで……アバイエフ構想が注目されるのである。この特徴の拡張範囲の中心がイラン語水名分布圏の西端に当たるからである」。⁽²³⁾

このように γ の起源問題はロシア語史にとってもスラヴ民族史にとっても非常に重要な鍵となっている。筆者がここでたびたび引用しているフィリンの「ロシア語、ウクライナ語、白ロシア語の起源」の結論も、概して、上に述べたハブルガエフと同じである (→ [VII] も参照)。すなわち「東スラヴ言語圏は共通スラヴの g の発音面で極めて早期に南・北二大方言地帯に分裂したとする」立場は正当であり、「破裂 (閉鎖) 音 g の閉鎖の消失が一度にではなく、徐々に進行したことを考慮するならば、この現象の端緒となる時期は共通スラヴ期であると言える。破裂性を残したのは、東スラヴにあっては、スロヴェネとクリヴィチの方言であり、他の種族方言の場合

は γ に転じたのである」⁽²⁴⁾。そして、こうした構想は「大きな確度を持って」(ハブルガエフ)近年の考古学の発見に符合しており、また考古学者の側からも支持されていると見てよいだろう⁽²⁵⁾。

しかし、現在、ロシア語歴史文法や歴史方言学の教科書の多くは γ の発生をスラヴ祖語の時代にまで遡らせるのではなく、歴史時代早期のものであり、かつ各スラヴ語毎に個別に発生した現象だとする立場に立っていると考えられる。それは理論的にはスラヴ学者セリーシシェフ、レール・スプワヴィンスキ等、そして何よりもロシア語学者アヴァネソフの研究に立脚したものであろう。また、膨大な研究で知られる「北部ロシア方言と中部ロシア弁の成立」の中心的な編著者オルロヴァ (И.Г. Орлова) もアヴァネソフの支持者だとすることができよう⁽²⁶⁾。アヴァネソフは、論文「言語地理とロシア語史」(1952)の中で、先ず第一に、南ロシア方言の γ とウクライナ語の h のルーツは同じであり、 h は γ の狭めの力の程度が小なる時にできるもので、そのことによって開口調音となり、結果として呼気の障害箇所は後退し、相対的に弱い摩擦噪音を伴った後方調音が得られること、ウクライナ語は語末の r (g) を無声化して x (ch) に変える可能性を持つが (例、 pir [pix] = ロシア語 $por > porb$)、それはこの r (g) が γ に対応する (γ の音質を有する) からであり、事実ウクライナ方言は $\gamma \sim h$ の間に多くの中間的な調音階梯を有すること、また実験音声学の示すところによれば、ウクライナ語の r の調音には後舌調音の存在が認められるが、その後舌調音は咽頭部ないしは喉頭部の一定の活動を伴うという、すなわち $g > \gamma > h$ の調音階梯についての音声学的解明を行い、その上に立って、第二に、 $\gamma > h$ への変化について言えば、ウクライナ語の事実 (語末の $r > x$) から、それは弱母音消滅以後であり、かつ語末における γ の無声化以後に続く過程でなければならないという推定、したがって第三に、 h の生成以前、ウクライナ語と南ロシア方言はどちらも同じように摩擦後舌音 (γ) 地域であったと推定され、これら両地域が接続地域であること、そしてこの辺り一帯が11世紀末—12世紀初めの「ルーシの国」(Русская земля)、すなわちキエフ、ベレヤスラヴリ、チェルニゴフ公国の地に相当する地域であることから、それをオカ川沿いに北東方向へ若干広げ (コロムナからスターラヤ・リャザンまで)、更に白ロシア南部まで含めた「ルーシの国」一帯こそ γ の発生の原点であり、そうだとすれば、 γ は「ルーシの国」の「相対的統一の初期 (в более ранний период ее относительного единства)、すなわち12世紀半ば以前の発生であると推論したのである。更に、彼はこうした後口蓋音の変質過程は他のスラヴ諸語における同様の過程とは独立して発生したものであるとする立場を堅持している。

γ (h) の文献上の立証はどうであろうか。勿論、当時、摩擦音であることを示す特別な手段が存在した訳ではないから、文献的な立証と言っても、それは、 r 文字の脱落 (摩擦音の時は破裂音の時よりも調音弱化的に脱落し易い) ないしは外国語文献における翻字習性を通じた間接証明である。しかし、既に記したように (→ [V] 一注5)、ヴィザンツ皇帝コンスタンチノス7世の「帝国統治論」に現れる、ギリシャ語によるスラヴ語転記を以てする、10世紀のキエフにおける γ の存在証明の試みは極めて疑わしい。これよりは幾分確度が高いと思われるが、フラン

ス王アンリ I 世に嫁した、ヤロスラフ賢公 (Ярослав мудрый, 988–1054) の娘アンナ (Анна Ярославна, 1025–1070) が幼帝フィリップ I 世に代わって行った、ラテン語文書へのキリール文字署名 (АНА РЪИНА) が、11世紀のキエフにおける γ の証明として用いられることがある。すなわち、Agnа regina (女王アンナ) のラテン語署名に替えて、キエフ時代から g の摩擦音的発音に慣れていたアンナがラテン語の g を γ あるいは h と読んでいたかあるいはこの位置の g を発音しなかった結果、上のようなキリール文字署名となって現われるというのであるが⁽²⁷⁾、РЪИНАにはフランス語 reine [rɛn] の古い発音が反映された可能性もあり、十分な論証力があるものだとはされていない⁽²⁸⁾。一般的に、歴史文法に挙げられる、 r 文字の脱落例では、(разнѣвася) разнѣвася (Изборник Святослава 1073 г.) 等 (南部)⁽²⁹⁾、ラテン語転記例では、14–15世紀のガリチの諸文書 (南西部) における hlubocigo 等 h による翻字法、あるいは同時期の白ロシア (西部) における、скиргайло (Skirgaila, リトワニア公の名前) 等に見られる外来語の g の破裂音表現 (kr) がある⁽³⁰⁾。何れにしろ、南西部 (ウクライナ語地域) や西部 (白ロシア地域) において文献的に「確かな証拠」が現れるのは早くとも14世紀以後なのである⁽³¹⁾。したがって、ハブルガエフも、 $g > \gamma$ (h) の発展をより遅い時期 (11–12世紀、時には13–14世紀にまで) に設定しようとする構想は概して白ロシア北方言やチェコ語方言資料に基づいており、それはいずれもこの特徴が最初に発達した可能性のある地域の方言ではなく⁽³²⁾、 γ の起源問題の解決は考古学資料に頼らざるを得ないとしている⁽³³⁾。

北 東 部		北 西 部		西 部	南 東 部、南部	南 西 部	
ロストフ、 スズダリ		ノヴゴロド	プスコフ	スモレンスク ポロツク	リ ャ ザ ン チェルニゴフ	ガ リ チ ヴォリニ	キエフ
[b]		[w]					
[r]		[r] 及び [ɾ] (*)		[ɾ]			
[u', ɥ']		[u'']			[u''] (*)		[u', ɥ']
[c'-ш'] [z'-ж']		[c'] [z']		[c'-ш'] [z'-ж']			
[л]		[кл, ɾл]		[л] (*印は方言毎の異同を表す)			

さて、ガルシコヴァの「ロシア語歴史方言学」(1972)は、「鼻母音消滅以後、第二次軟子音発生以後、弱母音消滅以前」、すなわち10-12世紀前後の古代ロシア語の方言状況を総括して、それが、①スー音性破擦音 [u'] とシュー音性破擦音 [v'] の弁別を行うか否かによって、②軟シュー音と軟スー音の弁別を行うか否かによって、③ [r] の破裂的調音 [g] か摩擦的調音 [ɣ (h)] かによって、④摩擦唇音 (губной сплант) の両唇音的調音 [w] か唇歯音的調音 [β] かによって、⑤ *tl, *dl > l か kl, gl かによって、別表のような地理的分布を成していたとしている (同記述・分布表は、概ね、ガルシコヴァ、ハブルガエフ「ロシア語歴史文法」(1981)において反復されている)⁽³⁴⁾。

この分布表に挙げられる、軟シュー音と軟スー音の弁別を行わない方言 (例、помѣсати, псенице, сапозникъ, зѣбание; до шего дне, Вашиль, жимою, поражи 等) は、最も早いものは11-12世紀の古代ノヴゴロド文献に見られるが、主として14世紀初頭からの古代プスコフ文献に現れるという (今仮にこれをス弁と呼んでおく)⁽³⁵⁾。ス弁は、本来、スー音が軟音 (c', z') である時に生ずる軟シュー音との混同で、ここでは口蓋化の程度がより大きいため、シュー音訛 (шепелявость) のスー音 (c'', z'') を形成する事になるのである。またこれは、既に上に述べた、シャフマトフの言うマズリイ弁の特徴であって、ポーランドのマゾフシェ (Mazowsze)、マウォポリスカ (Małopolska)、シレズィイヤ (シュロンスク Śląsk) 地方を中心にして、その周辺部へ向かっては、ポラブ語、更にツ弁をス弁の一変種という観点に立つならば、下ソルブ語、北部白ロシア方言、北部大ロシア方言、そしてス弁の古代プロシャ語や、バルト諸語に接続する北西部ロシア方言といった、いわば「同一共通特徴をもちバルト海沿岸言語圏」を成すものだという⁽³⁶⁾。フィリンも亦、ス弁は音韻的な特徴からしてツ弁 (u'') と同じ現象であり、同一起源であるとして、それは「バルト圏に8-9世紀頃に発生した異民族言語の影響、に基盤を持つスラヴ祖語の音遺産の発展の産物であり、恐らくは、当時形成されたバルト言語連合といったもの」に関係があると述べているが、⁽³⁷⁾、これについては最終的には未解明であると思われる。

ところで、現在の東スラヴ言語圏には、摩擦唇音 (губной сплант) に関して、[β] - [Φ] ([v] - [f]) の相関的有声・無声対立を持つ現代ロシア語以外に、[β] ([v] [w]) が語末及び子音前では非成節音 [ɣ] ([u])、語頭では成節音 [y] ([u]) に交替する南大ロシア方言や一部の北大ロシア方言、それにウクライナ語や白ロシア語がある (ただし、白ロシア語は正書法としてѣの文字を使うが、ウクライナ語はこれを用いない、従って、[голова] - [голоў], [праўда], [унук], [удова] 等は、正書法上は、ウクライナ語 голова-голів, правда, внук, удова 等、白ロシア語 галава-галоў, праўда, унук, удава 等、なお、ウクライナ語は、開音節 (o, i) と閉音節 (i) が交替するため、голова-голівとなり、正書法上もア弁を記録する白ロシア語は無アクセント音節の o > a となり、галава-галоў)⁽³⁸⁾。文献的には、こうした β と y の交替はすでに11-12世紀の南ロシアに現れ (паоуль, прауда, вѣгодити-Изборник 1073; усѣмъ, вѣже-Галицкое евангелие 1144 г.)、さらに13-14世紀のスモレンスク、プス

コフ、ノヴゴロド、すなわち西部、北西部に見られるほか、この交替が最も明瞭に現れるのは弱母音消滅以後の文献であって、特に語頭子音前 (въноукъ > внук [унук, ѣнук]) に頻発するという⁽³⁹⁾。弱母音消滅期に既に、в がソナント [w] であればこそ、語頭や語末子音前でそれは容易に母音的に [u] - [ɯ] に変わる事ができたのであり、かつまたそれを正書法の上に反映させたのであるが、一方弱母音消滅期にも噪音としての [v] を持っていた東スラヴ方言は当然同様の位置でそれに対応する無声唇歯音 [f] を発達させたのである。フィリンもアヴァネソフも、11-12世紀の南部に в-y の交替があつて、同期のノヴゴロドに見られないことから、「古代東スラヴ方言における [w] - [v] の対立発生は歴史時代直前の時期に属する」ものであり、「少なくとも11-13世紀には東スラヴ言語圏は唇歯音 в の発音面で二分されていた。すなわち、南西部全体(ドネブル上流を含めて)及びオカ、ドン上流は両唇音 [w] を知っており、一方北東部(ロストフ・スズダリ国)及び北方言の基幹部分は唇歯音 [v] を持っていた。この方言区分がそれ以前にも存在した可能性も決して排除できない。それがいつ発生したかは、スラヴ語圏全体の [w] [v] の発生問題が論争中であり、今の所判らない」としている⁽⁴⁰⁾。

(2) 11世紀末-12世紀初めにかけて後期古代ロシア国家は徐々に中世特有の円心的分解過程を辿り始める。封建分領の時代の開始である。政治的かつ経済的独立を得た封建諸公国間の接触関係は次第に希薄になり、かくして、各領域を中心とした、言語的差異の均等化域と局地的な言語改新圏の成立基盤が整うのである。したがって、封建分領開始以前、ないしは非常に古い時代から継承してきた方言現象の等語線(例えば、r~r' の対立等語線)は封建公国の政治的境界線に合致しないが、封建分割期以後、すなわち後期古代ロシア期に発達してきた現象の等語線は原則として封建国家の政治境界線に一致するのである。逆に言えば、等語線が封建国家の政治境界線に一致するとき、それは後期古代ロシア期に発達した方言圏を反映したものと推定できる。すなわち、後期古代ロシアの方言圏は、概して、封建諸公国間の政治境界線に相応する。このような前提に立って、ハブルガエフは、それが、ノヴゴロド・プスコフ政治連合体を中心とした北西部地帯、ロストフ、スズダリ国を中心とする北東部地帯、リャザン公国を中心とするオカ中流弁圏、ガリチ、ヴォルィニ国を中心とする南西部地帯、また「古代ロシア期には、隣接方言の言語改新が原則として広がっては行かなかった方言圏」として「消極的に」のみ認められる、南ボレーシエを含むウクライナ・ドネブル右岸と白ロシア南部を併せた南部地帯、そして中央部地帯である、とする推定を行ったのである⁽⁴¹⁾。中央森林地帯は、既に述べたように、長期に亘ってバルト圏であり、したがってバルト人スラヴ化地域であるが、正にこの圏内で、起源の異なる二つの東スラヴ方言は、一方では「バルトの籐い」(балтийское сито)⁽⁴²⁾を経つつ、他方では両東スラヴ語の対立的方言体系を「重ね合わせ」(наложение)⁽⁴³⁾つつ、一連の特徴を持った方言圏、すなわち中央部方言地帯を形成して行った。しかも、異なる公国領域間に跨る方言相互干渉地域を含み、東西からはリトヴァ(リトヴァ:東バルト種族連合体の一)やゴリャヂ(голядь:西バ

ルト種族連合体の一)そしてステップ遊牧民の影響を、南北からは古くからの南北の文化的中心たるキエフやノヴゴロドの影響の及ぶ地域全体を包含するような方言圏であった。そこはまさしく諸民族、諸言語・方言の坩堝であった。以下、主として、ハブルガエフの「ロシア語の成立過程」(1980)と「『原初年代記』の民族名称学」(1979)、オルロヴァ編の「北ロシア方言と中部ロシア弁の成立」(1970)、アヴァネソフ、オルロヴァ編の「ロシア方言学」(1965)、ガルシコヴァの「ロシア語歴史方言学」(1972)等に則りながら、これらの方言地帯推定の根拠、その方言地帯の特徴等について記述する。

1) 北東部方言地帯とオカ中流弁圏：オルロヴァは、北ロシア方言の成立過程を検討するに当たって、まず、北方言を含めた西部地域一般に広がる音韻、形態、統語面の共通特徴に触れているが、その際、オルロヴァはこうした共通特徴を「西部一般拡張現象」(явления общезападного распространения)と呼んでいる(以下「西部一般現象」とする)。「現代の方言区分の上に新に覆いかぶさるような特別な境界領域が浮き彫りになる……(その)拡張範囲はウクライナ語にも白ロシア語にも(時には白ロシア語だけ)、またロシア語の西部方言(時には南西部方言だけ)にもそして程度の違いこそあれ北部諸方言(北方言の南東部を除いて)にも及んでいる」。(44)換言すれば、「ロシア方言地図帳」(45)とウクライナ語、白ロシア語の方言資料を比較検討する時、後期古代ロシア期(12世紀[あるいは11世紀末]以後13世紀頃までの)に発展・拡張した言語改新の等語線が、ドネプル中流からノヴゴロド周辺に至る古代ルーシのほぼ全土を席卷する一方で、古代ルーシにとっての辺境の地、ロストフ・スズダリ国及びオカ中流域(ムロム・リャザン国)、すなわちヴォルガ・オカ川中流間には浸透しないことが判明するのである。西部地域が古代・中世を通じて相対的にはつながりを保持してきたことは、現代ロシア方言学が認定しているいわゆる「西部方言地帯」(западная диалектная зона)の存在にも投影されていると言えよう。序でながら、現代のいわゆる「方言地帯」(диалектные зоны)を、東経36度線(東へ方向転換する以前のオカ川南北線)と北緯56度線(ほぼモスクワ-ヴラヂミル線上)が構成する座標軸に例えて説明すれば、第1象限は北東部地帯、第2象限は北西部地帯、第3象限は南西部地帯、第4象限には南西部地帯が若干浸食し、その残部を南東部地帯が占める。加えて、第2象限のほぼ全体と第1象限の右上がり上半が北部地帯、第3象限全部と第4象限のほぼ右下がり下半が南部地帯、その北部と南部地帯の狭間に中央地帯が占めている。そして、西部地帯は、ほぼ東経36度線以西を塗りつぶす方言圏である(46)。したがって、現代の北部、南部、西部方言地帯全体の形状は、概ね、オルロヴァの言う西部一般現象のデフォルメだと考えることができよう。

西部一般現象の中で、弱母音消滅以後発達してくる、音の面での最も典型的な言語改新としてハブルガエフが挙げているのは、① сви́ня [svin'jja] > сви́ня [svin'ja] > сви́ня [svin'a] , сви́н'н'а [svin'n'a] 型(īは、いわゆる「弱い位置」の緊張弱母音で、消失→本稿Ⅷ, 2及びⅤ)の語における[j]の消失現象(第1例は弱母音消滅以前の古代ロシア語、第2例は現代ロシア語、第3例の典型はウクライナ語 сви́ня、第4例の典型は白ロシア語 сви́ння、cf. 古スラヴ語

свинии) と語末軟唇音の硬化現象の一貫性である(例えば、現代ロシア語は語末 [m'] > [m] の場合は硬化するが—дамь>дам; столъмь>столом 等—それ以外の唇音では軟性を保存する、ところがここでは一貫して唇音硬化が起るのである、семь>сем; голубь>голу[п]; голу[п]; любо[ф] 等)⁽⁴⁷⁾。これらの音の面での等語線が概ね次のような一連の形態面での等語線に重なることから、これらは全てはほぼ同時期(11世紀～14世紀)に発生した言語改新であることを示唆したものと考えることができる。すなわち、②指示代名詞 тот の語幹に [j] を添えた形の使用(таја [f.sg.nom.], tyjy[f.sg.acc.], toje[n.sg.nom.]等)、③3人称代名詞主格への斜格語幹 [j] の援用(jero, jemy 等より jon, jona 等)、④述語としてのいわゆる「新パーフェクト」(новый перфект)の使用(поезд ушовши; он уехавши)⁽⁴⁸⁾、等である。

一方、後期古代ロシア期(14世紀以前)のロストフ・スズダリ方言(北東部方言)の言語改新等語線の東は、この西部一般現象の等語線の東と相互に絡み合いながらも、その東を大きく踏み越えて北西進・西進する事はなく、概ね相応している⁽⁴⁹⁾。ロフトフ・スズダリ言語改新の重要なものは、①両唇摩擦音 [w] の不在、すなわち唇歯音 [v] の一貫性(→上例)、②長軟シュー音 [s's'], [z'z'] の発達(様々な口蓋化やヨット化で得られた合成軟シュー音の閉鎖音要素の排除、すなわち s't's'>s's'; z'd'z'>z'z', [ш'ш']ука, до[ж'ж']и等)、③['e'>'o](やはり、弱母音消滅以後の現象で、硬子音—軟子音の音韻的対立の発展に伴って、軟子音後硬子音前の ['e] の円唇母音化、несль>нес>нёс、これらは広義でのヨ弁 ёканье であるが、нёсу, бёру, ёму 等の狭義のヨ弁も北部の特徴)、④再帰助詞(—ся, —сь)の硬子音化(мою [с], купал [са])等である。

また、古代ノヴゴロド言語改新現象としては、①複数与・造格同形(полесам, за лесам; к новым избам, за новым избам)、②бм>мм; дн>ннのような同化(обман>омман; родной>ронной)、等が挙げられるが、これらの東限は西部一般現象北東限にはほぼ一致しており、ノヴゴロド政治境界線の範囲内におさまる⁽⁵⁰⁾。

ハブルガエフが作成している図(本稿添付の別図はそれを若干改作したもの)によれば、西部一般現象が描く等語線の東は、北緯56度線以北では大きく東経36度線以東へ傾いて、拡散した形を成しているが、等語線東の太さの大小は居住民間の接触関係の程度の差を表しており、ヴォルガ沿い以北での等語線の東の拡散はこの地域での双方向からの入植者の浸透と相互接触が深く幅広かったことを示唆していよう。そして、以上三つの等語線東はよく相関しており、「北東部系現象、ノヴゴロド系現象、西部一般現象間の相互作用地帯はロストフ・スズダリ・コロニーとノヴゴロド・コロニーの政治境界線に合致すると見てよい」のである⁽⁵¹⁾。また、西部一般現象等語線東は、北東部地帯の西方向、すなわち36度線と56度線の交差する辺りへ来ると極めて圧縮した形に変わっているが、これは方言間の相互接触断絶線を表しており、この辺りで14世紀に至るまでも西バルト方言を保存していたと見られるゴリャヂ族居住領域の存在がスラヴ系住民の相互浸透、接触の障壁として作用した可能性が推定されるのである。尤も、ゴリャヂの存在が、現

代ロシア語の原点であるロストフ・スズダリ方言のこの時期まで(モンゴル来襲以前)の純粹培養を助けたという側面も見えておかななくてはならないであろう。

ブリーナ(былина)の英雄イリヤー・ムーロミェツ(Илья Муромец)のシリーズに登場する「無頼漢鶯丸」(соловей-разбойник)の形象はゴリャヂを象徴化したものだと言われている。半人、半鳥の怪物たる「無頼漢鶯丸」は、文化果つる辺境の北東部から文化・政治の中心キエフへの道に立ちはだかり、耳をつんざくような独特の鋭い口笛と咆哮でもって旅人を脅かしたという。「古代ロシアのヘラクレス」たるイリヤー・ムーロミェツは、「眠れる森」(леса дремучие)を切り拓き、そこに住む敵を滅して、スモレンスク経由の迂回路ではなく、ヴォルガ・オカ川間とキエフを繋ぐ直通路を敷いて行くのである。かくして、北東部方言地帯は9-11世紀以前に実現した東スラヴ普遍の言語特徴(母音重挿や*tj, *dj>ч, ж等)を備える一方で、11世紀以後に拡張してくる、ウクライナの、白ロシア的、ロシア方言的言語改新は知らない。「タタールのくびき」以前は、「およそ11-12世紀以後ヴォルガ・オカ川間に定着した地域スラヴ方言の担い手は、ノヴゴロド・キエフを繋ぎ、スモレンスクを経由する文化・政治交流の枠外にあった」のである⁽⁵²⁾。

こうして、北東部方言の担い手の交流方向は、概して、ノヴゴロドに関係する北部、北西部方向であって、これら双方向からの力関係の安定する所に三種の等語線(ノヴゴロド、ロストフ・スズダリ、西部一般現象)が相関的に定まったのであり、西方向は交流断絶方向であったと考えられる。では、ロストフ・スズダリ(北東部)方言の南限はどこか。それは、r~r'の対立等語線(北部東スラヴ方言と南部東スラヴ方言の対立等語線)であり、12世紀中葉に独立するリャザン公国の境界線に合致するという⁽⁵³⁾。こうして、北東部方言の南部にオカ中流弁が分離することができる。したがって、西部一般現象の排除する地域(北東部地帯とオカ中流圏)は共に早期に他の古代ロシア一般から切り離されていたが、決して内的統一性を持っていた訳ではなく、北東部とオカ中流域との結びつきが活発化するのは13世紀以後のタタール・モンゴル来襲以後、モスクワ大公国の拡張以後のことである。このことは、例えば、現代の南大ロシア方言トゥーラ群(тульская группа)が北東部的なものと南部的な特徴の両面を持つことに現われている。ハブルガエフが作成している等語線地図を見れば、トゥーラ群は南方言の特徴たる両唇音[w]を欠くロストフ・スズダリ言語改新の範囲に属しているが、このことは、リャザン公国と共にこの方言群が、北東部地域との差異と同時に北東部地帯と同様西部一般現象から排除されるという共通性を持っていたことを示唆するものであろう⁽⁵⁴⁾。これは現代の方言学の言うロシア語の南部方言地帯(южная диалектная зона)の形状にも投影している⁽⁵⁵⁾。

2) 北西部方言地帯：西部一般現象とは、結局、本来のキエフ国の地に発達した後期古代ロシア期の言語改新であつて、南のキエフ(ドネプル中流)を原点とするこの勢力はロストフ・スズダリ圏とオカ中流圏(ヴォルガ・オカ川間)を除いては強い力でもって北上して行ったのであるが、キエフ国の衰退と封建公国の台頭に従って、南から北へ向かう西部一般現象の拡張範囲は狭

まって行った。すなわち、ヴォルガ・オカ川間に続いて今度はノヴゴロド圏への浸透を停止するのである。しかし、基本的な改新の主流は南から北方向であって、上例のノヴゴロド言語改新は南方向へは向かわず、専ら東方向へ向かい、ロストフ・スズダリ言語改新と接触、相関しつつ、その東限は次第に東経36度周辺に定まって行った⁽⁵⁶⁾。北西部地帯の存在は、ノヴゴロド改新の等語線によってだけではなく、だいたい北緯56度線上に沿って東経36度線一帯に達する辺りまで延びて、ノヴゴロド・プスコフ方言と白ロシア、中部ロシア方言中央、南ロシア方言西部とを分かちロシア・白ロシア対立等語線によっても明らで、それは北西部地帯の南限を表しているという⁽⁵⁷⁾。

3) 南方方言地帯、南西部方言地帯：ハブルガエフによれば、南部地帯の限界線は、ウクライナ方言の完全な地図帳が公刊されていない現状では、一般的な情報に頼る予備作業的な推定のレベルで「消極的に」のみ認定できる方言地帯だとしている。すなわち、後期古代ロシア期には、南ポレーシエ（ウクライナ北西部、白ロシア南東部のウクライナ・白ロシア境界域）を含むドネプル右岸のウクライナ方言は白ロシア南部方言と共通の単一言語域を成していたであろうと考えられ、例えば、現在ブリビャチ流域に広いウクライナ・白ロシア転移帯（*говоры переходные от малорусских к белорусским*）があることからこの共通言語域を南部地帯として分離することは妥当であり、その北限は白ロシア内方言分化線、南限はガリチ、ヴォルィニ国政治境界線だとしている⁽⁵⁸⁾。

南西部方言地帯も、概ね、ガリチ、ヴォルィニ国の範囲だと考えられる⁽⁵⁹⁾。西部一般現象がドネプル中流（キエフ）から北上していた頃、ガリチ、ヴォルィニ方言の分化が進行し、この範囲内では、弱母音消滅が惹起した様々な局地的言語改新に見舞われるのである。それは、例えば、弱母音消失によって生じた新しい閉音節母音の代償延長的現象の一環とも考えられる、[e] 母音の長音化すなわちソボレフスキーの「新しい も」(шесть [s'est'ɤ] > шѣсть [s'ĕst' > s'ĕst']⁽⁶⁰⁾、VIII 「後期古代ロシア期」時代区分参照) や [o] 母音の長音化 (овыца > воовця)⁽⁶⁰⁾、あるいはまた同じく弱母音消失の連鎖反応である *jъ > ĭ (*jъgrati > грати) 等である。そして、これらの改新は、最初先ずキエフでなくガリチ、ヴォルィニの文献(12世紀後半)に現われるのであり、タタール・モンゴル来襲以前はキエフ方言には浸透せず、局地的なものに過ぎなかったが、ウクライナ民族(народность)の統合過程が進行していく中で初めてこの南西部の範囲を越えて拡張して行くのである。換言すれば、現在のウクライナ語の原点はガリチ、ヴォルィニであり、キエフではない。キエフを原点とする言語改新は西部一般現象であり、その特徴は、既に記述したように、現在のウクライナ語に入っていたとしても、それは、ウクライナ語だけの特徴ではなく、白ロシア語やロシア方言(北東部方言を原点とする現代ロシア標準語を除いて)も取り入れている特徴でもある。

4) 中央部方言地帯：添付の地図によっても明らかなように、古代ロシアの文化的な中心は、東スラヴ人居住領域の地理的中心地ではなく、むしろそこを取り囲むような、キエフやノヴゴロ

ド（また後にはロストフ・スズダリ）といった地理的周辺部にあった。地理的中心地は中央森林地帯であって、本来バルト人スラヴ化地域に相当している。そこはスラヴ人にとっては長期に亘って未開拓地であり、6世紀頃に分化したスラヴ人が、数世紀の期間をおいた8-9世紀以後ようやく、南部東スラヴ方言の担い手、北部東スラヴ方言の担い手として再び会い見えるところでもある。そして、例えば、北部出身者は r 弁、ツ弁を、南部東スラヴ方言の担い手は r 弁と二つの破擦音の弁別を知っていたはずである。東スラヴ人の二つの系譜の言語的表現である r と r の現在の対立等語線は、地図にみるように、北に押し上がり、中央部地帯と北西部地帯の対立線になってしまっているが、考古学資料による南北の対立線ははるかに南、スモレンスク以南の、中央部地帯の正に中央を走っていた⁽⁶¹⁾。この言語学資料と考古学資料の二つの資料から中央森林地帯への入植の流れの力関係がどのように変わって行ったかを知ることができよう。

スモレンスク（現在、ロシア共和国内）、ポロツク（現在、白ロシア共和国内）といった西ドヴィナ、ドネブル上流の辺りは、本来北部東スラヴ方言の担い手の入植地であり、従って、言語的には r 弁、ツ弁地域であるはずであるが、ハブルガエフ等によれば、12世紀末-14世紀の当該地域の古文獻（例えば、スモレンスクの条約文書や白樺文書等）は南部の特徴である r 弁と北部の特徴であるツ弁を共存させていると言われており、それはこの地域での南・北両東スラヴ方言の相互接触関係を示したものであろう。上述のように、南大ロシア方言が r 弁地域であること、また現在の白ロシア標準語が r 弁地域であること（小数の借用語の破裂音調音を除いて）— 方言によっては咽頭摩擦音 $[h]$ 地域を含むが⁽⁶²⁾—を考慮するならば、 r のこの地域への北上は白ロシア語の成立開始に先立つ14世紀以前のことであろうと考えられている。 r の北上の早さとエネルギーに比べれば、ツ弁の南下はもっと複雑長期に亘るものであり、二つの破擦音の弁別を行う南部の影響下に、白ロシア語は二つの破擦音に席卷されるが、結局、それを硬化しつつ受容するのである⁽⁶³⁾。ロシア語が、このツ弁を一般化しないで、方言的なものにのみ押しとどめた事情は上に述べたとおりである。

さて、こうした性格の中央部地帯は、大きくは西部一般現象の範囲内にあって、ノヴゴロド言語改新に相関するロシア・白ロシア対立等語線を北限とし、白ロシア内方言対立等語線を南限とする範囲、すなわちポロツク、スモレンスク、チエルニゴフ国にまたがる範囲である。地理的には周辺部である北西部、北東部、オカ中流、南西部の各方言域が概して封建諸公国の政治境界線に合致していることを思えば、この方言圏は三つの諸公国に及んでいるが、結果的には南部的な要素の影響を受容してしまっている。この範囲の言語特徴としては、上述の r 弁のほか、両唇摩擦音（語末、音節末での $[u]$ 、 $[w]$ ）の普及（→注38）参照）、あるいはまた動詞第一変化現在人称語尾における $[e]$ の保存（нес $[ér']$ ）等が挙げられ、これらは後期古代ロシア以前の早い時代から北上して、北西部には達しなかった点で共通性を持つものであるが、一方この期の言語改新には、円唇母音 $[o]$ $[y]$ 前での語頭添加音 v の使用（вутка, вотчим）、ロシア語とは異なる、「強い位置」緊張弱母音の強母音化の態様（мышь, шия）（→Ⅷ、後期古代ロシア期参照）

等が挙げられる⁽⁶⁴⁾。これらの言語改新は、概して南大ロシア方言、白ロシア語、ウクライナ語に共通であり、これらも亦、それとはほぼ同時期の西部一般現象同様、南のキエフ弁の北上による。そしてこれら新旧の現象の総合がロシア・白ロシア対立等語線である。

しかし何と言っても、中央部方言地帯特有の最大の特徴は異化型ア・ヤ弁の存在であり、それは統一古代ロシア語の生成と崩壊の間に、まさにこの圏内を生地として発生し、かつ周辺に拡張して行った現象であり、周辺部からの移入ではない。周辺への拡張のあり方は、正統原初的な異化型のア・ヤ弁(後述)の形式をそのまま輸出すると言うよりは、むしろ周辺方言の特徴と相互作用を起しながら、変質、変形した様々なア・ヤ弁の異型として波及して行ったのである。r~r'の対立が原初的な時代の東スラヴ語ないしはスラヴ語を二分していたとすれば、ア弁対オ弁の対立は、南・北東スラヴ語の統一によって再編した統一古代ロシア語(統一東スラヴ語)を再再編して二分する程大きな出来事であったと言える。その意味では、開音節法則や弱母音の消滅と言った現象とは違った意味で語史上重大であり、これらがスラヴの統合の象徴であったとすれば、r~r'弁やア~オ弁の対立は東スラヴの大きな分化の象徴とも言えるのである。シャフマトフの東スラヴ語分化説の問題提起において重要な柱であったことは勿論であるが、今日でもなお有効な、1914年のドゥルノヴォ、サカロフ、ウシャコフ作成による「ヨーロッパにおけるロシア語方言地図試案」(この「ロシア語」は東スラヴ語の意→注45参照)の方言区分原理の根底にこの二つの現象が置かれていたことも、その重要な意義を物語っている。

さて、中央部地帯におけるア・ヤ弁の生成と発展について述べる前に、先ず方言学や歴史文法が行っているア弁及びヤ弁の定義と分類の基本輪郭を確認しておきたい。ア弁(аканье)は、広義には、無力点音節における非狭母音(非高母音 гласные неверхнего подъема)の非弁別(弁別性喪失 неразличение)であって、それを弁別するオ弁(оканье)に対置される。例えば、в [о] да́-в [ó] ды; л [’е] са́-л [’é] с; ст [а] но́к-ст [á] н のオ弁に対して、ア弁は в [а] да́, в [Λ] да́, в [ъ] да́, в [ы] да́-в [ó] ды; л [’и] са́, л [’и^е] са́, л [’е] са́, л [’а] са́, л [’ь] са́-л [’é] с; ст [а] но́к, ст [ъ] но́к-ст [á] н のようになる。上例のような力点直前音節以外の無力点音節では、どのア弁も強い劣化音 [ъ], [’ь] に変わる(これはいわゆる旧来の弱母音ではなく、新しく発生してくる劣化母音である)。すなわち、音韻面からみれば、ア弁の本質は無力点音節における母音の弁別能力の劣化現象であり、無力点音節における母音音素の減少である。ハブリガエフに倣えば、劣化母音音素 [α] を発達させた体系である(в [α] да, л [’α] са 等)⁽⁶⁵⁾。また、狭義には、硬子音後の無力点音節非狭母音の非弁別の場合だけを指してア弁、軟子音後の場合はヤ弁(яканье)と称して区別する場合がある。ヤ弁は更に [α] の種類によって、イ弁(иканье)、イエ弁(еканье)等の類型を有する。力的直前音節における [α] の実現態様は方言によって異なり、その特徴によっていくつかのタイプがあるが - 狭義のヤ弁には異化型(диссимилиативный тип)と非異化型(недиссимилиативный тип)、狭義のヤ弁には異化型、中庸型(умеренный тип)、強変化型(сильный тип)等⁽⁶⁶⁾一、

大別すれば、異化型と非異化型であろう。前者は、力点直前音節の〔α〕が力点音節母音の舌の高さに応じて異化的に定まるのに対して、後者では、力点音節母音とは独立して定まる場合である。つまり、異化型ア・ヤ弁の特徴は、力点直前の〔α〕の母音の舌の高さと力点音節母音の舌の高さが異化の関係にあることである。

そして、この異化型と称されるタイプこそ、正にア・ヤ弁のメカニズムと本質に関わっており、ア・ヤ弁史の重要な鍵なのである。異化型類型の共通点は、力点音節に〔a〕（低母音、広母音 гласные нижнего подъема）が来る時、力点直前音節には〔a〕以外の母音（非低母音）が、力点音節に〔и/ы〕〔y〕（高母音、狭母音 гласные верхнего подъема）が来る時には、力点音節に〔a〕（非高母音）が現れることである（例えば、ст [ъ] ла́, м [ъ] я́, н [’и] сла́と ст [a] лы́, кр [a] сы́вый, н [’a] су́）。異化型の類型に、同化・異化型（ассимилятивно-диссимилятивный тип）があるが、これは力点音節の低母音〔a〕に対して非低母音的な〔α〕として反発せず、同じ低母音〔a〕を以て同化的に反応するため、そのように呼ばれている（同化 л [’a] са と異化 л [’a] су の共存）。しかし、異化型がいくつかの類型を持つ所以は、力点音節に〔e〕〔o〕（中開き母音 гласные среднего подъема）ないしは〔ē〕〔ō〕（狭中開き母音 гласные верхне-среднего подъема）が来る時の力点音節母音の反応の差異に存する⁽⁶⁷⁾。力点音節にこれらの母音が来たときに、力点音節母音がどのように反応するかについての類型例を示さなければならないが、先ずこの〔ē〕〔ō〕母音について触れておかねばならない。

前者の母音〔ē〕は、*oi, ai, ē > ě (=ѣ) であるが、前舌低母音の音質を備えたと言われる古スラヴとは違って、東スラヴはもっと前舌の上がったつまり閉じた母音〔ē〕であったが、軟子音間での〔e〕〔ē〕の弁別性が次第に失われて行くに従って、〔ē〕は存在意義を喪失して行った。しかしその喪失過程は、後述するように、方言毎に異同がある。一方、〔ō〕は、弱母音の消失まで古代ロシア語に存在していたであろうスラヴの古いアクセント・イントネーション体系の再編、すなわち、古い音調アクセントが強さアクセントに転じて行った時期に、上昇調アクセント（acute）音節、いわゆる新上昇調（новоакутовая интонация）の〔ó〕（後述）から発生したもので、より狭口の、時には二重母音的な性格の音〔u̯o〕であったと考えられている（文献的にはカモーラ ка́мора と呼ばれる符号（[˘]）が付さる、зако́н 等、方言では二重母音的な мо́лод у́дй 等）⁽⁶⁸⁾。今一つ、下降調（circumflex）の〔ō〕と「強い位置」弱母音〔ъ〕からはより広口の〔o〕が発生するのである。それ以前は、下降と上昇の音調によってのみ区別される〔o〕に音声学的な差異はあっても、音韻的な差があった訳ではなく、一つの音素が存在したにすぎない。しかし、この一つの音素は二つの音素〔o〕〔ō〕に分化し、更に前者の〔o〕には弱母音派生の〔o〕が参入する状態が、ロシア語史の上に現れることになるのである。

回り道になるが、ここで、新上昇調（новый акут）について触れておかねばならない。ア・ヤ弁が無力点音節における母音の劣化現象であるとすれば、その根底には、スラヴの古いアクセント体系が深く関わっていると考えられるからである。スラヴ祖語のアクセント体系は、音節に

おける、音量 (quantity 音 (節) の長さ) と強勢 (stress) そして音調 (tone) の相関性の上に構成されていた。かつて、スラヴ学者菱山氏は、その「ロシア語史概説」(邦文で書かれた最初のロシア語史)において、いみじくも書かれている。すなわち、「之らは相互に関連している。即ち、stress された音節は stress されない音節よりも高い tone をもち、長く発音される。したがって、もしも stress の勢いがロシア語のように強ければ、stress された音節と他の音節の間における tone 並びに quantity 上の違いも増し、このことは逆に言えば、stress のない音節における tone, quantity が軽視ないしは無視されるということであり、tone, quantity が stress に依拠するということになる。一方、stress の勢いがセルボ＝クロアチア語のように比較的弱ければ、或はチェック語におけるようにある音節に固定しているときは、tone 及び quantity はそれぞれ独立の語形成機能を保つ。しかし、この場合でも tone, quantity の特徴が十分に発揮されるためには、その音節はやはり stress されなければならない。我々は accent という概念の下に、ある言語においては stress を、他の言語においては tone を含ませるのであるが、上記の如き内部的相互関係から当然のことと言える。更に付言すれば、例えば個々の音節における固有の (潜在的な) tone が stress の下において明白になる状態を tone accent というのである」⁽⁶⁹⁾。

スラヴ祖語は、長音節 (印欧語長母音とそれを含む diphthong, diphthongoid 起源) に上昇と下降の二音調を、短音節 (印欧語短母音とそれを含む diphthong, diphthongoid 起源) には下降調だけを持っていたが、語形変化や語派生等に関連して音調変化・移動 (metatony, accent-shift, метатония) が発生し、上昇調から下降調に、下降調から上昇調に転ずる場合があり、これが新下降調、新上昇調であったと言われている。この段階からスラヴ祖語は、長音節に、上昇調、下降調、新上昇調、新下降調そして短音節に、下降調、新上昇調という 6 種類の音調を区別したことになる⁽⁷⁰⁾。こうして、ある時期、語頭力点 (アクセント) 長音節だけが上昇、下降の別を持ち得たのであって、語頭力点短音節は下降調のみであった。また、非語頭力点音節は必ず長くかつ上昇調である。ところが、非語頭 (語中、語末) 短音節は力点を得ると、それ自身長音化して新上昇調に転ずるか、あるいは力点が先行音節に移動して先行短音節を長音化して新上昇調を得さしめ、先行音節が長音節の場合も同じくそれを新上昇調に転じさせたという⁽⁷¹⁾。そして (古代) ロシア語の [o] がスラヴ祖語の変音調 (flat) ・集約性 (compact) 短母音 [ǫ] (＜印欧語短母音 a, o) に起源を持つ短母音であることを考慮するならば、この音の上に落ちる上昇調はまさしく新上昇調でなくてはならない筈である。さらに、この新上昇調の [ǫ] を、「弱い位置」弱母音消失を契機として、狭口の [ō] あるいは二重母音的な [ūō] に再編する東スラヴ方言が現れて来るのである。例えば、поле, молодой (m.sg.nom.), селом, город, год に対する воля, вудля, молодой, молодудой (f.sg.obilq.), селō, селу, корōва, кор-уова, кōт, кудт 等がそれである。

さて、上述のように、様々な異化型ア・ヤ弁は、力短直前音節対力点音節の母音の関係において、[a] 以外 (非低母音) - [a] (低母音)、また、[a] (低母音) - 高母音、のように反応す

る点では共通性を持っていた。問題は、力点音節に中開き母音 [e] [o] と狭中開き母音 [ē] [ō] が立つときであり、この場合方言によって、力点直前音節母音の反応には差異が現れることになる。このことは、逆に言えば、それぞれの方言に存在した [ē] [ō] の存在証明、換言すれば、それが5母音体系 (и/ы, у, е, о, а) か7母音体系 (и/ы, у, ē, ô, е, о, а) かあるいはその過度的体系であったかを証明していることになる。今、方言学や歴史文法が挙げる異化型ア・ヤ弁の内、論点となる主要な類型を下に見ておくことにする(下に示した方は中央部内での関係であり、型名はそれぞれ地名 Обоянь, Щигры, Суджа, Жиздра に由来する)⁽⁷²⁾。

а) アバヤーニ型 (原初形) (обоянский [архаический] тип) → 南東

а (力点直前音節)	-ē, ô (力点音節)	例	с'алô, с'астр'ê
и	-е, о		с'илôм, д'ир'êвн'а

б) シシグリー型 (щигровский тип) → 南東

а	-ē, ô	例	с'алô, с'астр'ê
и	-е		д'ир'êвн'а

с) スツヂャ型 (суджанский тип) → 東

а	-о	例	с'алô
и	-е		с'истр'ê

э) ジズドラ型 (白ロシア型) (жиздринский [белорусский] тип) → 北西

а	-о, е	例	с'алô, с'астр'ê
---	-------	---	-----------------

ハブルガエフ、ガルシコヴァは、ロシア方言におけるこの [ē] と [ō] の音素には、機能的、構造的、系譜的に相関性があることに注目している⁽⁷³⁾。すなわち、弱母音消滅に関連して、最終的に音調アクセントが失われて以後、かつての新上昇調の [ô] を [ô] に再編して保存した方言における [ô]—[o] 対立 (高と低の対立) はより古い同一対立関係 [ē]—[e] の保存を支えたのである。したがって、[ô]—[o] の対立が発生しなかった方言では、[ē] の音素もまた早期に失われている。例えば、白ロシア、スモレンスク周辺では、早期に [ē] が失われ、12—13世紀初めにかけての文献に [ē] (ѣ) が見らず、それ故 [ô] の発達はあり得なかった。中央部地帯に最も西部に位置する白ロシア (ジズドラ) 型は、この事実によく合致している。一方、ロストフ・スズダリ起源の文献は、14—15世紀の当該方言に [ô] の事実を提供していないが、この期の [ē]—[e] の対立の確認によって、少なくとも「14—15世紀の境界には」いまだ [ô]—[o] の対立関係がここに存在したであろうことを推定させるのである⁽⁷⁴⁾。ロマノーフが「ロシア文法」において、音素としては既に失われていたが、当時のロシア語になおも存在した高尚体の正音法としての [ē] を「細音エ」(тонкое [ѣ]) として、「太音エ」(дебелое [е])

と区別したことが想起される⁽⁷⁵⁾。

ハブルガエフ、ガルシコヴァは、後期古代ロシア期に達する頃には、北部地帯両方言（北西部、北東部）及びオカ中流方言は [ê] [ô] を含む 7 母音体系を、中央部地帯の西の方言（ジズドラ型）はそれを含まない 5 母音体系を、中央部地帯の東の方言は、アバヤーニ型（原初型）等によって判るように、7 母音体系を備えていた、と結論している⁽⁷⁶⁾。したがって、このことから、中央部地帯の西にあった 5 母音体系（力点音節における）は、[ê] – [e] の対立を中和すべく、7 母音体系の東方向へ向かって移動し、一方、東（中央部地帯南東部）に発生した異化型ア・ヤ弁は、逆方向へ向かって、いわば 5 母音体系を向かい討つ形で、西方向へ移動して行ったと言う推理が可能なのである。ハブルガエフが作成している次の表は、以上の推論を見事に証明している⁽⁷⁷⁾。

シズドラ型		→	スツヂャ型		←	原初型、シシグリ型	
а ('а)	и, ы, у е, о		а ('а)	и, ы, у о		а ('а)	и, ы, у ê, ô
ъ ('и)	а		ъ ('и)	е а		ъ ('и, 'е)	е, (о) а
(北 西)			(東)			(南 東)	

現在の大ロシア方言南西部（後期古代ロシア中央部地帯東部）に広く行われている上のスツヂャ型では、力点音節の [o] はより高い [ô]（狭中開き母音）として力点直前に反応し、[e] はより低い音（中開き母音）としての反応を示していることから、この地域は、異化型が広がる以前は 7 母音体系を持っていたかも知れないが、異化型が始まる頃には [ô] [o] 対立を残しつつも、既に西の方からの影響で [ê] – [e] の対立が中和していたことが判明するのである。5 母音体系と 7 母音体系の中間地点にあるスツヂャ型の [α] 反応は、中央部地帯内での東西の妥協の産物であることを示している。また、東からやってくる異化型の原型では、当然、低音母 [a]（力点直前）対 [e] [o]（力点音節）の組み合わせとしてではなく、[a] 対 [ê] [ô] の組み合わせとして出現する訳であるが、ジズドラ型の場合、[ê] – [ô] を知らないにもかかわらず、原型の表面的な結果だけを受容して、力点直前に [a] を一般化したものだと考えられるのである。さらに、中央部地帯（異化型ア・ヤ弁地帯）の南（南白ロシア）と北（中央ロシア、オカ北方）の地域は本来非ア弁地域であったと想像されるにもかかわらず、非異化型ア・ヤ弁が広がっていることに注目しておかねばならない。例えば、オカ北方には、いわゆる中庸型（умеренный тип）が広がっている。中庸型とは、[ʼα] が後続の子音の硬・軟性によって反応するタイプであり、力点直前音節の非狭（高）母音が、硬子音前では [ʼa]、軟子音前では [e] [и^е] [и] のように変わるのである（н'ослá > н'аслá; в'ед'от > в'ид'от）。ここではヨ弁（ёканье）（нёсу, вёсна等）の基礎の上に異化型ないしは同化・異化型のア・ヤ弁が重なったと考えられ、非ア弁

は常にア・ヤ弁の強力な波に飲み込まれて行ったことが判明するのである。ア・ヤ弁とオ弁がぶつかる時、ア・ヤ弁はオ弁を駆逐して、常に「勝利していく」のである⁽⁷⁸⁾。

異化型ア・ヤ弁こそ、全てのア・ヤ弁の原型であり、さらにその源流がアバヤーニ型であると言うことに関連して、ハブルガエフが行っている重要な指摘がある。すなわち、①異化型分布圏では、異化型ア弁（狭義）は、原則として、異化型ヤ弁を伴うのに対して、非異化型ア弁（狭義）は多様なヤ弁（異化型、同化・異化型からモスクワ型イ弁まで）を伴う、②異化型分布圏でだけ、硬子音後と軟子音後の〔α〕の実現タイプが完全一致する、③異化型分布圏でだけ、硬子音後も軟子音後も、ア弁とヤ弁のメカニズムの同源性を証する、強い劣化母音〔α〕（ъ／’ъ）が存在する⁽⁷⁹⁾。

このこと（特に、②、③）は、シャフマトフの、ア・ヤ弁起源に関する劣化説（редукционная гипотеза）とも良く符合している⁽⁸⁰⁾。シャフマトフによれば、ア・ヤ弁の起源は、無力点音節における非狭（高）母音（o, e, aの三種の短母音）の劣化に始まる（aは本来長母音であるが、この劣化が始まるまでには、短母音に変わっていたとされる）。また、狭（高）母音（и, ы, у, ê, ô）は長母音であって、劣化しない。その結果、無力点音節において、〔o, a>ъ〕、〔’e, ’a>’ъ〕のような変化が発生した（シャフマトフ自身はいわゆる「弱母音」と区別するためにα, εの符号を用いているが）（例、водá>вѣдá, хвалѣ>хвълѣ, сторонá>стѣрънá, липа>лѣпъ; п’атѣ>п’ѣтѣ, с’елó>с’ѣлó, вóл’а>вóл’ъ等）。シャフマトフによれば、母音の長短別のある時期には、あらゆる無力点音節でこのような発音がなされていたと言う。そして劣化母音の発生は、力点音節の長母音（非狭母音）の長音化を引き起こしたが、のちそれは短母音化し、それを償うべく力点直前の劣化母音を長音化して、〔ъ>a〕〔ъ>a, e〕のように変わった（例、воды>вѣды>вѣдѣ>вады; н’есѣ>н’ѣс’ѣ>н’ас’ѣ等）。力点短母音音節の場合は、劣化母音の発生による影響を受けて長音化しなかったため、そのままの形を保存した（例、косóй>късóй, перóм>п’ѣрóм等）。これは結局以下のような結果をもたらしたことになる。

硬子音+a（力点直前音節）	┌	-и, ы, у, ê, ô（力点音節）
軟子音+a, e		
硬子音+ъ	┌	-o, e, a
軟子音+ъ		

この表に現れている力点音節と力点直前音節における相互反応の形式は、正に異化型と称される形式に他ならない。すなわち、異化型なるものは、実は共時面でみた表面的な観察によるものであって、母音の長短別がなくなり、古いアクセント・イントネーション関係が崩れた後では、単に母音の舌の高さによる異化関係に見えるに過ぎない。大きな視点（弁証法的な視点）に立つて見れば（言語学風に言えば通時的かつ共時的視点の総合ということになるが）、結局母音の長短別の再編期に生じた代償延長的な現象の一種だったと考えることができるのである。いわゆる「弱母音」の消滅現象もまた代償延長的な現象の一種であったことを考え併せれば、ア・ヤ弁と弱

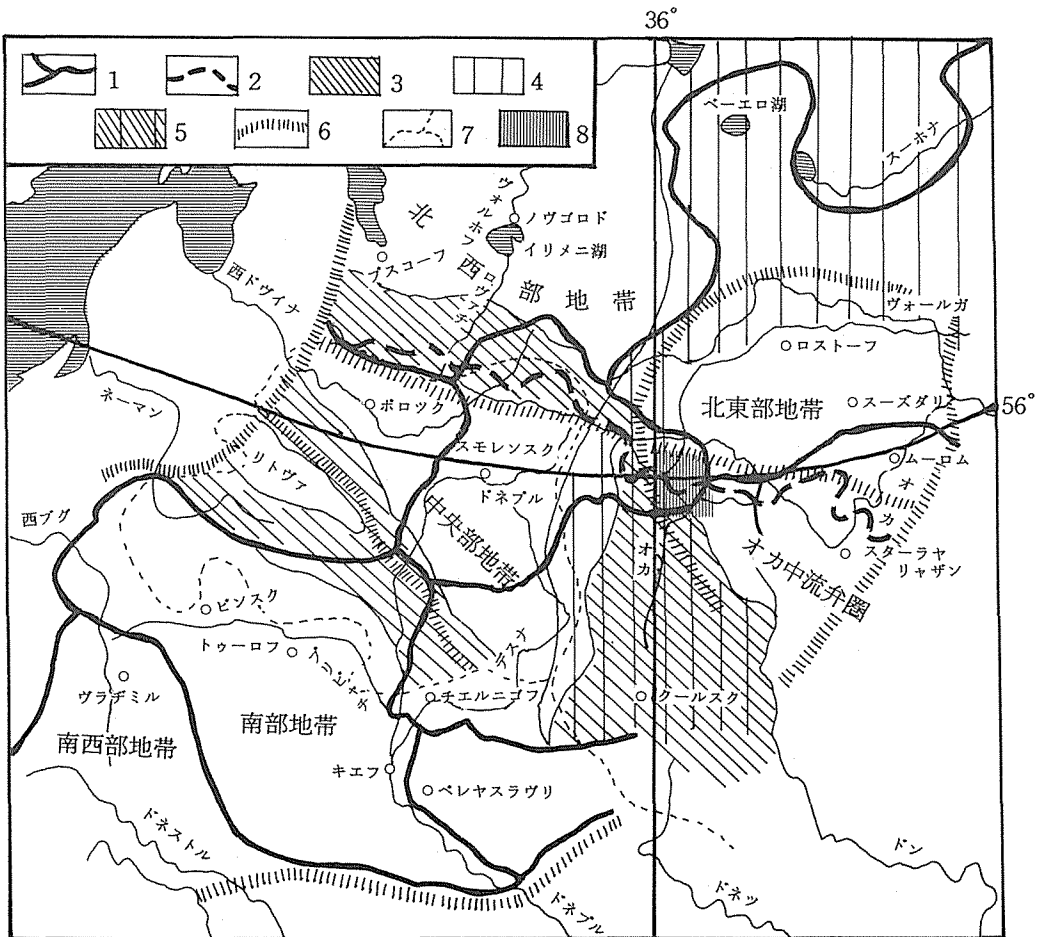
母音消滅現象は、実は底流において深くつながっている同一原理の異なる現象化に過ぎない。ともあれ古いアクセント・イントネーション関係の崩壊とそれによって起こるドミノ現象は、ロシア語史に大きな再編の嵐を持ち込んだにちがいないのである。

最後に、ア・ヤ弁の発生時期について言及しておきたい。すでに、このことについては本稿〔V〕において触れたが、以上の歴史的、地理的事実関係とそれに基づく推論からして、ア・ヤ弁の発生は、弱母音消滅以後であり、それに続く〔ø〕発生以後であることは明らかである。また、中央部地帯、すなわち中央森林地帯をスラヴ人が獲得するのは8-9世紀以後であることを考えれば、それ以前のア・ヤ弁発生は全くあり得ない。これらの相対時間の比較によって、11世紀以前にはア・ヤ弁の発生はあり得ないことになるのである。さらに、古代ロシア・クルガン域範囲の外にあるオカ中流方言（リャザン国）に広がる同化・異化型ア・ヤ弁とセイム川周辺域方言（スッチャ、シシグリー、アバヤーニ）に広がる異化型との起源的同一性（異化型と同化・異化型は同じように古く、かつ同根）ということと、後期古代ロシアの言語改新（西部一般現象）がヴォルガ・オカ川間には拡張しなかったという歴史方言学の推論を考え併せれば、中央部地帯での、無力点母音の弁別特徴の中和化傾向の萌芽（劣化母音萌芽）は、これらの両方言の関係断絶以前であるという推論が可能である。そうだとすれば、その萌芽は、オカ中流方言の独立分化以前（リャザン国の独立は12世紀）、すなわち11世紀末以前であったということになるのである⁽⁸¹⁾。一方、セイム・オカ上流方言は未来の白ロシア方言とは、それ以後も関係を継続し、13世紀以後はリトワ公国に編入されて行くのである。したがって、ハブルガエフは、ア・ヤ弁の発展段階は二段階であり、第一段階は無力点音節の非狭（高）母音の劣化母音化段階、すなわち〔α〕（ъ, 'ь）としての一元化段階（стадия унификации）であり、第二段階は、力点音節母音の質に従って（上記シャフマトフ説参照）、既に一元化した母音〔α〕を様々な形に実現して行った段階であり、〔α〕の「調整」（упорядоничение）段階である、と主張している。そして、この二段階はシャフマトフの劣化説によく符合しており、第一段階は11世紀末-12世紀以前、第二段階が、一般にア・ヤ弁の発展期と言われている12-14世紀の間の期間だとしている⁽⁸²⁾。ア・ヤ弁の発生は、ロシア語史家によって、9世紀から14世紀まで大きな幅があるが、二段階説（劣化説）に併せて行われたこの年代推定には極めて注目すべきものがあると考ええる。

ア弁とオ弁がぶつかる時、ア弁は「勝利する」、このことはア弁が模倣され易く、かつ習慣化され易い特徴を備えていることを物語っている。それはリズムを伴うからであろう。勿論、一定の子音組織（硬・軟子音対立）の発達、すなわち子音の弁別機能の発達という条件が必要であるが（何故ならば、ア弁は、母音の弁別機能の劣化、縮小を引きずって行くわけであるから）、何よりも音調アクセントから強勢アクセントへの移行を契機として、ロシア語の波のような強と弱のリズムの対立は激しくなり、語から句へ、そして文へと波及していったと想像される。しかも、文化的辺境の地に萌芽した要素が、その後連鎖反応のように、ウクライナを除く東スラヴの主要部を大きく席卷していった様は正に民族のエネルギーの軌跡なのである。

地図解説 後期古代ロシア (12-14世紀) 方言地帯

1. 古代ロシア公国境界、2. $r \sim \gamma$ 対立境界線、3. ロシア・白ロシア語対立等語線東、白ロシア内方言対立等語線東、4. 西部一般現象等語線東 (北東部で、古代ノヴゴロド方言、ロストフ・スズダリ方言相互接触地域を画く)、5. ロシア・白ロシア対立等語線退潮域、6. 後期古代ロシア方言地帯概略線、7. 現代白ロシア方言範囲、ウクライナ、南大ロシア方言境界線、8. ゴリャヂ居住領域



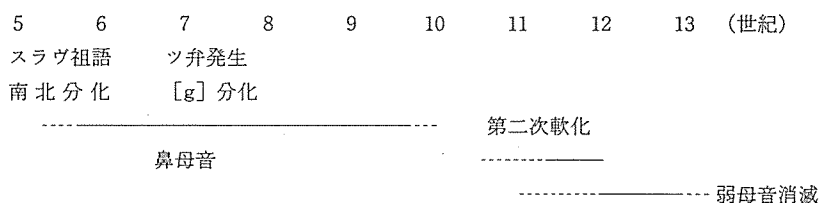
〔注〕

1. 日本古代ロシア研究会(国本、山口、中条他)、ロシア原初年代記、名大出版局、1987、p.6-7(p.7), 320(注)
2. エンゲルス「家族、私有財産および国家の起源」(国民文庫、大月書店)の訳者(村井康男、村田陽一)は、巻末に付された「解説」の中で訳語の解説を行っているが、それによれば、Volk(people, народ)はここでは主として「人種系統上の種々の階梯の形質群の総称」の意義で用いられ、「民属」(すなわち基幹種属(Volksstamm)の拡散分布によって生じたいくつかの各種属群(形質群))という訳語を当てる、一方Nation(nation, нация)に対しては「言語、領域、経済生活、および、文化の共通性のうちにあらわれる心理状態、の共通性を基盤として生じた、歴史的に形成された堅固な人間共同体」の意義に用いて、これには「民族」という訳語を当てるとしている。また、Stamm(tribe, племя)＝「種族」、Völkerschaft(народность)＝「民属集団」、Nationalität(nationality, национальность)＝「民族性」の訳語が当てられている。そしてVölkerschaftについて、「種族連合(Bund der Stämme)から初期民属国家にいたる、種々の段階の個別民属の結合体の一般的呼称と解されるが、しかし、Völkerschaftが種族連合と区別して用いられる限りでは、単一民属への融合の契機に重点があると思われ、その後期の状態における、つまり国家の形成へと移行しつつあるいは既に移行した民属集団を指すものと、考えることができる。…種族連合が血縁団体の最も発達した形態とすれば、これは既に血縁団体の解体の形態である」としている。また、Nationalitätは「その中から近代的民族(Nation)が生まれてきたまたは生まれつつある民族基体」を指し、「言語領域を共通にしながらも、まだ経済生活および文化の緊密な共通性を発達させるまでには至っていない、歴史的に形成された人間共同体である」が、それを「終局的に民族に形成したものは、資本主義による単一領域市場の創出」である。これまでソヴィエトで発行されてきた、ロシア語史(成立過程)関連の文献に用いられるнародность, народ, национальность, нацияの用語も、ほぼここに言われるような意味で用いられるが、народностьも нацияも、ここでは、以上を含みつつも、「民族」とした。今日、ロシア語成立史を考える上でも、エンゲルスのこの古典的名著は、いささかもその価値を失っていないばかりか、その有効性を益々増大させていると言えるだろう。
3. В. И. Борковский, П. С. Кузнецов, Историческая грамматика русского языка, Иаука, М., 1965, стр.32-33
4. 佐々木秀夫、ロシア古文典《音韻考》、ナウカ、東京、1985、p.1-7
5. К. В. Горшкова, Г. А. Хабургаев, Историческая грамматика русского языка, Высшая школа, М., 1981, стр.24-27
6. К. В. Горшкова, Г. А. Хабургаев, Истор. грам..., стр.27-30
Albert Bartoszewicz, Kławdija Gorszkowa, Georgij Chaburgajew, Очерк исторической фонетики и морфологии русского языка, Państwowe wydawnictwo naukowe, Warszawa, 1988, стр.15-18
(Zarys grammatyki historycznej języka rosyjskiego, Fonetyka i morfologia, Wydawnictwa UW, Warszawa, 1982)
7. А. И. Соболевский, Лекции по истории русского языка, Изд. 4, Mouton & Co., 1962, стр.74-75
8. Р. И. Аванесов, Проблемы образования языка великой народности. - ВЯ, 1955, №5, стр.25
9. А. А. Шахматов, Введение в курс истории русского языка, Часть 1, ,
Петроград, Типография "Научное дело", 1916, стр.55-56
Ф. П. Филин, Происхождение русского, украинского и белорусского языков,
Изд. Наука, Ленинград. отд., Л., 1972, стр.265
10. В. В. Иванов, Историческая грамматика русского языка, Изд. 2, ,
Просвещение, М., 1983. стр.105 (Изд. 3, 1990, стр.93)
11. Г. А. Хабургаев, Становление русского языка, Выс. школа, М., 1980, стр.101.
Ф. П. Филин, Происхождение..., 1972, стр.263

12. С.Б.Бернштейн, Очерк сравнительной грамматики славянских языков, Введение и фонетика,
Издательство АН СССР.М., 1961, стр.292
[h] を声門音 (гортанный) とするのは誤りとしている。
13. Ф.П.Филин, Происхождение..., стр.245
С.Б.Бернштейн, Очерк..., стр.293
Р.И.Аванесов, Лингвистическая география и история русского языка.- ВЯ, № 6, 1952, стр.44
フィリンの同著によれば, r の方を始源的であるとする説もある。
14. Ф.П.Филин, Происхождение..., стр.244
С.Б.Бернштейн, Очерк..., стр.295 (分布図)
15. А.А.Шахматов, Очерк древнейшего периода истории русского языка, Типография Императорской
академии наук, Петроград, 1915, стр.36
16. Ф.П.Филин, Происхождение..., стр.246-247
С.Б.Бернштейн, Очерк..., стр.294, 296-297
17. Р.Нахтигал, Славянские языки, Изд. Иностранной литературы, М., 1963, стр.219-220 (Rajko
Nahtigal, Slovanski jeziki, Ljubljana, 1952)
С.Б.Бернштейн, Очерк..., стр.294
Ф.П.Филин, Происхождение..., стр.246
18. Ф.П.Филин, Происхождение..., стр.246-248
С.Б.Бернштейн, Очерк..., стр.294-295
19. Ф.П.Филин, Происхождение..., стр.247
С.Б.Бернштейн, Очерк..., стр.294
20. С.Б.Бернштейн, Очерк..., стр.295
21. Ф.П.Филин, Происхождение..., стр.249-250
22. Историческая типология славянских языков (под ред. А. С. Мельничука),
Наукова думка, Киев, 1986, стр.39-40
23. Г.А.Хабургаев, Этнонимия «Повести временных лет», Изд. Московского университета.
М., 1979, стр.107-108
24. Ф.П.Филин, Происхождение..., стр.255
25. Г.А.Хабургаев, Этнонимия..., стр.106
В.В.Седов, Восточные славяне в VI-XIII вв., Изд. Наука, М., 1982, стр.272
26. А.М.Селищев, Критические замечания о реконструкции древнейшей судьбы русских
диалектов.- Избранные труды.зд.Просвещение.М., 1968, стр.33-34
Образование севернорусского наречия и среднерусских говоров (отв. редактор В.Г.Орлова),
Наука, М., 1970, стр.165, 224
Р.И.Аванесов, Лингвистическая..., стр.44-47
27. С.П.Обнорский, С.Г.Бархударов, Хрестоматия по истории русского языка, Часть I, Учпедгиз,
М., 1952, стр.16
28. В.В.Иванов, Историческая грамматика..., 1990, стр.95
29. スヴァトスラフ文集。スヴァトスラフ大公 (Святослав Ярославич, 1027-1076) はヤロスラフ賢公の息子、
アンナ (Анна Ярославна) の弟。キエフ大公。本来ブルガリア皇帝シメオン (885-927) の為になされたギ
リシャ語からの翻訳。「文集」はその写し。
30. В.И.Борковский, П.С.Кузнецов, Историческая..., стр.90-91
В.В.Иванов, Историческая..., 1983, стр.107 (1990, стр.95)
М.Петер, Историческая грамматика русского языка, I, Tankonyvkiado, Budapest, 1969, стр.66-67
31. В.И.Борковский, П.С.Кузнецов, ..., стр.91

32. Г.А.Хабургаев, Этнонимия..., стр.107
 33. Г.А.Хабургаев, Становление..., стр.100
 34. К.В.Горшкова, Историческая диалектология русского языка, Просвещение, М.,
 1972, стр.64-71 (стр.64-65に表)
 К.В.Горшкова, Г.А.Хабургаев, Ист.гр..., стр.61-65 (стр.62に表)

「鼻母音消滅は9世紀以前の時期に属する…10世紀前半には東スラヴ人は鼻母音を発音しなかった」(Горшкова, Хабургаев, Ист.гр, стр.53)、「10世紀には既に東スラヴ人は鼻母音を持たなかった」等(В.В.Иванов, Ист.гр.1983, стр.118/1990, стр.106)の記述(ヴィザンツ皇帝コンスタンティヌス7世の「帝国統治論」(948-952)における、ドネプル川早瀬の名称の記載(β ε ρ ο υ τ ζ η, ν ε α σ η τ)には、これに相当する古スラヴ語の вѣржи, неясътиに含まれる鼻母音要素はなく、これは当時既に古代ロシア語がそれぞれ вѣручи, неясъти 変わっていた事を証するものだ、と言う説明は多くの歴史文法の行うところである)、「前舌母音前の子音の半軟音性は11世紀中葉まで古代ロシア語に残った」(В.В.Иванов, 1983, стр.152/1990, стр.142)、「概ね11世紀半ばには…硬子音の位置的異音としての半軟子音はなくなった」(同, 1990, стр.143)、また、「子音の第二次軟化は10-11世紀の境界辺り」(Горшкова, Хабургаев, стр.53)であり、「ヴェシリエフ(Л.Л.Васильев)によれば、第二次軟化は漸次進行して行った。10世紀に狭母音 [i, ɐ] の前に始まって、11-12世紀の境目まで続き、より広い母音 [e, a] 前の軟化を以て完結した」(同, стр.53-54)、あるいはまた、弱母音消滅の端緒となる時期は「10-11世紀の境目」(同, стр.66)であり、それは先ず「弱い位置」弱母音の消失に始まり、「強い位置」弱母音の強母音化が文献的に確認できるのは12世紀以後であるから、「12世紀末には生きた東スラヴ語ではもはや弱母音は存在しなかった」(同, стр.67)、弱母音消滅過程は「概ね12世紀後半に進行した」(В.В.Иванов, стр.170/стр.159)「12世紀後半から13世紀初頭にかけての文献には弱母音消滅過程が広く反映している」(同, 1983, стр.171/1990, стр.160)、この過程は「古代ロシア語方言で一度に起こったものでなく、ある方言では既に11世紀に、またあるところではより遅く進行して行ったが、13世紀半ばまでには恐らく古代ロシア語全体において完結した」(同, стр.161)等の歴史文法の解説を総合すれば、鼻母音消滅、第二次軟化、弱母音消滅の言語内相対時間関係の概略図は、いま、これにツ弁の発生、[g]の音質の分化、を加えて示せば以下の通りとなろう。



35. Ф.П.Филин, Происхождение..., стр.267-268
 36. Ф.П.Филин, Происхождение..., стр.269
 37. Ф.П.Филин, Происхождение..., стр.272 ただし、オルロヴァはツ弁とス弁の直接的系譜関係を否定。フィリンはそれを批判。
 38. 現代ロシア標準語以外の東スラヴ語(方言)を総合すれば、文字 в は結局 [v], [w], [u], [ɥ] を表すことになる。ロシア語の в が噪音 [v]— [f] であって、ソナントでない事は言うまでもない。ウクライナ語では、母音前では、基本的には両唇摩擦音 [w] (円唇母音及び [j] 前、そして子音後絶対的語末で、例、вогонь, вуста, в'юн, барв; 非円唇母音前でも [w] が陵駕するが、標準語では [v] も可、例、трав, верх, високо)。子音前の、語頭、語中母音後、及び母音後絶対的語末で [ɥ] (例、унук, правда, ходив)。この語頭の [ɥ] は [u] と位置的交替を行なう (унук-внук)。すなわち、正書法上は、子音後では у を、母音後には в を用いている (наш унук-наша внука)。白ロシア語の в は摩擦唇歯音 [v] (例、вада)。上と同じく、子音前、語末で [ɥ] と交替する (例、праўда, кроў)。また同じく、語頭子音前で

- [u] - [ʊ] と位置的交替を行う(例、удава - саламяная ўдава)。(В.М.Русановский 他, Украинская грамматика, Наукова думка, К., 1986; Т.П.Ломтев, Грамматика белорусского языка, Учпедгиз, М., 1965, М.Г.Булахов 他, Восточнославянские языки, Просвещение, М., 1987 等参照)。
39. Ф.П.Филин, Происхождение..., стр.291-293
 40. Ф.П.Филин, Происхождение..., стр.293, 296
 41. Г.А.Хабургаев, Становление..., стр.149-150/этнонимия..., стр.63
 42. Г.А.Хабургаев, Становление..., стр.109
 43. Г.А.Хабургаев, Становление..., стр.149
 44. Образование севернорусского наречия..., стр.210, 200-212
 45. Атлас русских народных говоров центральных областей к востоку от Москвы, под ред.Р.И.Аванесова, Ан ссср, М., 1957.
1945年のソ連科学アカデミー・ロシア語研究所「ロシア語方言地図帳編纂資料収拾計画」に沿って収拾された資料に基づき発行された。「技術的な理由により」(Г.А.Хабургаев, Ист.гр..., стр.29) 第一巻が出版されただけに終わっている。現在、Диалектологический атлас русского языка, Центр Европейской части СССР, Выпуск 1, Фонетика, Наука, М., 1986.が出ており、Вып. 2 (形態編), Вып. 3 (統語編、語彙編)の続刊が予定されているというが(Русская диалектология, под ред. Л.Л.Касаткина, Просвещение, М., 1989, стр.25)、現状では予想がつかない(作業は1971-1980年に完了済という)。なお、今日ロシア方言学が提供している方言地図は二種: Н.Н.Дурново, Н.Н.Соколов, О.Н.Ушаков, опыт диалектологической карты русского языка в Европе, 1914/Диалектологическая карта русского языка (1964) 後者は Русская диалектология, под ред. Р.И.Аванесова и В.Г.Орловой, Наука, М.に初めて公刊された。
 46. Русская диалектология, под ред. Л.Л.Касаткина, Просвещение, М., 1989, стр.205.参照。「方言地帯」全体の関係を鳥瞰できる点で良い。
Русская диалектология, под ред. Р.И.Аванесова и В.Г.Орловой, Наука, М., 1965 / К.Ф.Захарова, В.Г.Орлова, Диалектное членение русского языка, Просвещение, М., 1970. 等の方言学関係図書は「方言地帯」の個別分割図を示すだけ。Русская диалектология, под ред. П.С.Кузнецова, Просвещение, М., 1973, стр.247. は全体図であるが、極度に抽象化された図。なお、КЗНЕТОФは「中央方言地帯」を区分していない。
 47. [j] の消失後、ロストフ・スズダリ方言以外の古代ロシア方言はすべて長軟子音に変じ、それは現在でもウクライナ、白ロシア、西部、南西部ロシア方言に残るが、それは後、更に一連の方言で短音化した。ウクライナ語も白ロシア語も共に長音の例には、життя, плаття (ウクライナ語), жыццё, плацце (白ロシア語) 等がある (cf. ロシア語 житьё, платье)。
 48. Он вставши. Они были в соревнованье включивши. 等 -ши 語尾の不変化形構文で、副動詞パーフェクト (деепричастный перфект) とも呼ばれる。先行動作の結果状態を表す「結果達成類 (результатив)」の機能を持つ (В.И.Трубинский, Очерки русского диалектного синтаксиса, Изд. Лен. ун., Л., 1984, стр.159-160)。[- 1 -] 分詞パーフェクトのアオリスト化 (単純過去化) という機能的再編によって生じたパーフェクトの意味分野の「真空」(ガルシコヴァ、ハブルガエフ「ロシア語歴史文法」(1981), p. 336) に、パーフェクトの新形式が復権したものだと考えられる。従って、「新パーフェクト」の発生は、古い [- 1 -] 分詞パーフェクトの再編以後ということになり、ハブルガエフは12世紀以前だと推定している。(なお、拙稿「ロシア語所有パーフェクトについて」- 大阪外大露語研究室、ロシア・ソヴィエト研究、15号、1989参照)
 49. Г.А.Хабургаев, Становление..., стр.126/Этнонимия..., стр.40
Энциклопедический словарь юного филолога (языкознание),
под ред.Г.В.Степанова, Педагогика, М., стр.84
 50. Г.А.Хабургаев, Становление..., стр.134/Этнонимия..., стр.48

Энциклопедический..., стр.84-85

51. Г. А. Хабургаев, Становление..., стр.127

52. Г. А. Хабургаев, Этнонимия..., стр.45

Энциклопедический..., стр.85

Илья Муромец, АН СССР, М.-Л., 1958, стр.384-385の記事と絵に次のような一文:「猛き勇士イリヤー・ムーロミェツはチェルニゴフからキエフに向かって出立するが、ブリャンスクの森に近づくと、その森には12の榎の木に、乗馬の人も歩行者も通さず、独特の口笛で耳をつんざく「無頼漢鶯丸」が住んでおり、イリヤー・ムーロミェツを見つけると口笛を吹き始め、20露里更に30露里と道を塞いで、益々大きな音で脅し始めた。そのため、馬は立ち往生してしまった。イリヤー・ムーロミェツは「無頼漢」の巢に近づくと、びんと張った弓を肩から取り出し、彼をめがけて鋼の矢を打ち放った。それは彼の右目に命中し、「鶯丸」は麦束のようにどすんと崩れ落ちた」。なお、「原初年代記」(1058)の記事に、「イジャスラフがゴリャチを打ち負かした」がある(Изяслав Ярославич, 1024-1078, ヤロスラフ賢公の子)。

53. Г. А. Хабургаев, Становление..., стр.130-132

Этнонимия..., стр.42-43

54. Г. А. Хабургаев, Становление..., стр.126 (図), 130-131

Этнонимия..., стр.40 (図)

55. Русская диалектология, под ред. Л. Л. Касаткина, Просвещение, М., 1989, стр.205

Русская диалектология, под ред. Р. И. Аванесова и В. Г. Орловой, Наука, М., 1965, стр.253

56. Образование севернорусского..., стр.228

57. Г. А. Хабургаев, Становление..., стр.135-137/Этнонимия..., стр.50

58. Г. А. Хабургаев, Этнонимия..., стр.62-62. Становление...には南部地帯の記述はない。

59. Г. А. Хабургаев, Этнонимия..., стр.63

60. 「弱い位置」の弱母音の消失によって生ずる新しい閉音節の [e] が代償延長的な長音化を受けて、すなわち СеСъ > СѣСъ > СѣС となり、それが文字 [ѣ] を以て12世紀後半以後のガリチ・ヴォルニニ文献(Добрилово евангелие 1164 : щѣсть, рожѣньи等)に初めて出現することを発見したのはソボレフスキーである。彼は、その [ѣ] = ѣ を「新しい ѣ」と呼び、[*oi, ai, ē > ɛ] 起源の「古い ѣ」と区別したのである。現代の北部ウクライナ方言や南部白ロシア方言ではこれに二重母音的 [ie] の調音を当てているといわれるが(шїєсть, пїєчь, камїєнь等)、ウクライナ標準語は [i] に変じている(шість, піч, камінь等)。古代ロシア語の [ѣ] の音質は、古スラヴ語(開口の前舌低母音 [ä])と異なり、閉口の前舌中高母音 [e] ないしは二重母音的な [ie] であったことを想起するならば、[ɛ, ie > i] の過程は想像に難くない(ウクライナ語は新旧の [ѣ] を共に [i] に変える: хлѣбъ > хліб; печь > пѣчь > піч、しかし、「強い位置」弱母音から発展した [o, e] は代償延長を行わない: днь > день であって、дїньとならない、したがってウクライナ語のこの過程は「弱い位置」弱母音の消失以後、「強い位置」弱母音の強母音化以前ということになるであろう)。

新しい閉音節の [o] もまた同一条件下で長音化する(Галицкое евангелие 1226 : овьца > воовця)。北部ウクライナ方言では кѹдѣнь, двѹор 等の他、кѹдѣнь, кѹдїнь, кѹдїнь 等が見られるという。南部ウクライナ方言やウクライナ標準語は кїнь, двір 等である。上の場合と同様、これらの場合も、二重母音化の過程を経たものだと考えることができる(конь-кобѣнь-кѹдѣнь-кѹдїнь-кїнь)。このようにして、ウクライナ語はバラダイム中の音節の開・閉に応じて、кїнь-коня, двір-двора 等の交替が起こっている。ロシア語や白ロシア語が知らない現象であり、ウクライナ語との分化現象では最古のものであろう。

61. Г. А. Хабургаев, Становление..., стр.142 (Карта 15)

Этнонимия..., стр.26 (Карта 2) (→ [VI] 地図)

62. Т. П. Ломтев, Грамматика белорусского языка, Учпедгиз, М., 1956, стр.36-37

А. А. Кривицкий, А. Е. Михневич, А. И. Подлужный, Белорусский язык
для небелорусов, Высшая школа, Минск, 1978, стр.59-61

63. Г. А. Хабургаев, Становление..., стр.107-108,139-140
Этнонимия..., стр.53-55
Т.П. Ломтев. Грамматика..., стр.45-46
64. Г. А. Хабургаев, Становление..., стр.137-138
Этнонимия..., стр.51-52
ロシア語 утка, отчим, вотчим (方言)
ウクライナ語 вутка (方言), вітчим, вотчим (方言)
白ロシア語 вутка 等
東スラヴ語の語頭添加音 (Prothesis) [w (v)] について、フィリンは「専門にこれを扱った論文がなく、ただその分布の概況を述べられるに過ぎない...北方向、東方向へ行けば行くほど、語頭添加音の使用は減退する」(Происхождение..., стр.299-300) としている。一般には、白ロシア語では普通であり、ウクライナ語は方言、標準語とも異同があるとされる。
ロシア語 (шея, мою)、白ロシア語 (шыя, мяю)、ウクライナ語 (шия, мяю) 等の差異は、緊張弱母音 (напряженный редуцированный) [ŷ] [i̯] の「強い位置」での強 (完全) 母音化の差異による。すなわち、北東部方言では、通常の弱母音と同じように、[ŷ > o] [i̯ > e] となったが、南西部や西部では [y] [i] に変わったのである (ウクライナ語はこの位置では更にこれらの音を統合している)。「弱い位置」では、普通の弱母音と同じように、全て東スラヴで消失した。my-ti > mŷ-ju; šija における [ŷ] [i̯] は「強い位置」であるが、piti > pi̯ju の [i̯] は「弱い位置」であり、пью (=p'ju) (ロシア語)、п'ю (ウクライナ語、白ロシア語) のように、[i̯] は消失している。なお、[ŷ] [i̯] は、それぞれ [ъ+j, y+j] 及び [ь+j, i+j] より発生した音である。
65. К. В. Горшкова, Г. А. Хабургаев, Ист. гр..., стр.99-100
66. 中庸型は、硬子音前 (力点音節) に対して [a]、軟子音前で [и] と反応する場合 (н'асу́, б'ады́; н'ис'и́, б'ид'е́)。強変化型は、全ての力点母音に対して [a] と反応するもの (н'асу́, н'асла́, н'ас'и́)
67. 母音に関する日本語タームの一部は、城田俊「ロシア語の音声」(風間書房、東京、1979) p.70-71 より借用。
68. [ō] は20世紀初頭までは知られていなかった。先ず、スホナ川沿岸トチマ群方言の調査をしていたスラヴィスト、オラフ・ブローク (Олаф Брок) によって発見され、次いで、ヴァシリエフ (Л. Л. Васильев) によって、16世紀の2種類の古文獻にカモーラ (˘) のついた単語が発見され、トチマ方言の [ō] との密接な関連が分かってきた。その後、多くの他の方言でも発見が続いたが、1912年シャフマトフはレカ村 (シャトウラ東方) の大工グリーシキン (И, С, Гришкин) の協力を得て、この村の方言調査を実施して、[ō] を確認、更に、1945年ヴィソツキー (С. С. Высоцкий) を団長とする方言調査団がシャフマトフ等の発見を検証した (Энциклопедический словарь юного филолога, стр.194-196)。
69. 菱山 忍、ロシア語史概説 (II) — 古代ロシア研究 5、日本古代ロシア研究会、京都、1964、p.262-263
70. А. М. Селищев, Старославянский язык, Часть I, Учгедгиз, М., 1951, стр.235-240
71. В. И. Борковский, П, С, Кузнецов, Ист. гр..., 1965, стр.84 (1963, стр.82-83)
例えば、*korljě > *kórljě > корóль (主格、単数; 語末弱母音にアクセントを持っていたが、すでにスラヴ祖語において先行母音にアクセントを移動して、新上昇調 новый аку́т に変わった。斜格 (коро́ля, коро́лю) には本来の上昇調 аку́т が残っている)。
72. Рус. диалектология (Л. Л. Касаткин), ...стр.49-51
В. В. Иванов, Истр. гр..., 1983, стр.218-219 (1990, стр.206)
Обоянь, Щигры, Суджа, Жиздра の位置については、Дурново, Введение в историю русского языка 添付の「南ロシア方言地図」参照。
73. К. В. Горшкова, Г. А. Хабургаев, Истр. гр..., стр.94-96
Г. А. Хабургаев, Этнонимия..., стр.58-60
Г. А. Хабургаев, Географическое варьирование системных отношений как материал исторической

- диалектологии – Русские говоры, Наука, М., 1975, стр.73–74
74. К.В.Горшкова, Очерки исторической диалектологии северной Руси, Изд.Мос, ун., М., 1968.стр.138
 К.В.Горшкова, Г.А.Хабургаев, Истр.гр..., стр.96
 Г.А.Хабургаев, Становление..., стр.147/Этнонимия..., стр.58
75. М.В.Ломоносов, Российская грамматика – Полное собрание сочинений, Том 7, АН СССР, М.–Л., 1952, стр.399–400,427
 山口 巖、ロシア中世文法史、名古屋大学出版会、名古屋、1991、p.134
76. Г.А.Хабургаев, Этнонимия..., стр.61–62
 К.В.Горшкова, Очерки ист. диал..., стр.138
 Р.И.Аванесов, Проблемы образования...–1955,ВЯ 5, стр.29–30
77. Г.А.Хабургаев, Этнонимия..., стр.62
 Г.А.Хабургаев, Геог.вар..., – Русские говоры, стр.76
78. В.Н.Сидоров, Умеренное яканье в среднерусских говорах и севернорусское ёканье – Из истории звуков русского языка, Наука, М., 1966,стр.106–107
 К.В.Горшкова, Г.А.Хабургаев, Истр.гр..., стр.101–102
 Г.А.Хабургаев, Становление..., стр.142
 なお、ア・ヤ弁分布図は、Г.А.Хабургаев, Становление...,стр.142 及び Этнонимия..., стр.26が良い (Дурново, Введение...添付地図参照)。
79. К.В.Горшкова, Г.А.Хабургаев, Истр.гр..., стр.103–104
 Г.А.Хабургаев, Становление..., стр.143–144
80. А.А.Шахматов, Очерк древнѣйшаго періода исторіи русскаго языка, Типография Импер. Ан, Петроград, 1915, стр.331–343
 異化型ア・ヤ弁の発生メカニズムを説明するためにシャフマトフが立てた仮説を「劣化説」と呼んだのはフィリンである (Ф.П.Филин, Происхождение..., стр.102)。このような場合にも、歴史文法は、一般に редуцированные гласные と呼んでいるが、*ŭ*ĩ>ъ, ь の旧来のいわゆる「弱母音」と区別するため、本稿では「劣化」「劣化母音」とする。
 О, Брок, Н.Н.Дурново, Е.Ф.Будде, С.П.Обнорский 等は劣化説を支持したが、Н, С, Трубешкой, Р.Якобсон 等は反対した。Р.И.Аванесов は発生時期については弱母音消滅以後を主張してシャフマトフに反論したが、結局は劣化メカニズムの支持者であろう。そして、劣化説は今日広く一般に支持された学説だと言えよう。しかし、А.Meillet, А.Vaillant, В.И.Георгиев, Ф, П.Филин 等はスラヴ祖語からの継承特徴としてア弁を説明している (В.И.Гергиев, В.К.Журавлев, Ф.П.Филин, С.И.Стойков, Общеславянское значение проблемы аканья, Изд.Болг.АН, София, 1968.において4人の執筆者が大論陣を張っている。Георгиев は「スラヴ祖語の母音体系とア弁問題」、Филин は「東スラヴ語のア弁の起源と発展」等。Филин 論文は、ブルガリア版を一部修正して、Происхождение..., стр.97–149 に再録されている)。
81. К,В,Горшкова,Г.А.Хабургаев, Истр.гр..., стр.106–107
 Г.А.Хабургаев, Становление..., стр.146–147
82. Г.А.Хабургаев, Становление..., стр.147/Этнонимия..., стр.51

(1991. 9. 17 受理)